
ローザ

伊佐山詩織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ローザ

【Zコード】

N2173D

【作者名】

伊佐山詩織

【あらすじ】

政治活動家でもあったローザが死んだ。その葬儀で再会した洋子は見違えるほどの大人の女になっていた。過激派の母と個性的な娘との確執に振り回された「僕」の視点から描く、時代に抗つた一人の女の人生。

第一章 死と再会

「おー、現役がきどるひじいで」

「ひつそやろー」

席に付くなり後ろで交わされた会話に少し気持ちを張り詰めながら、正面の、白い花の飾られた遺影に向かい、僕は心の中で手を合わせた。

『偲ぶ会』などと書いてみても、ローザの新左翼時代はもう三十年近くも前のこと、そのあとの紆余曲折で知り合った人たちは連絡が付かなくて呼んでないとのことだったから、ここに集まつた連中はほとんどが何十年ぶりの再会なのだろう。であつてみれば当然なことに、遺影への挨拶もそこそこ、皆、互いの無事を喜び合つので忙しく、僕の前の席に座つた男など、東京からの新幹線でワインをハ本空けたなどと豪語しつつ、畳に膝をついてよろけながら、会などをまだ始まってさえいないのに何を勘違いしたのか、そこのうに遅刻の詫びをして回つてゐる。

僕の席に挨拶に来た洋子は、正座して白のワンピースの裾を合わせ、申し訳なさそうに、「こんなとこに招待してよかつたんやろか？」
「完全に場違いやと思うけど、ええよ。お葬式には行けへんかったから」「やつたらええねんけど……」「さつき、現役が来てるつて……」「誰が？」と洋子は顔を曇らせた。

「何か、後の方で聞こえたんやけど「来どるよ。三人も」と声をひそめ、「だつて、断られへんや。もう、シャベリがあるんやな」「現役のことは、秘密?」「でもないけど、あまり言わんとつてな。じゃ、悪いけど」

洋子は立ち上がり、また他の席への挨拶に去つた。十七年ぶりの再会も、相手が洋子だと実にアッサリとしたものだった。

*

受付でもらつたコピーの年表を開くと、「一八歳……」の年、洋子誕生」とあり、僕は指折り計算して、ふう、とため息をついてしまつ。洋子に連れられて「本当のお母さん」の前に引き出された年、ローザは三十八、つまり今の僕らと同じ歳だったわけだ。

「あなた、お若いあなた」とさつきの新幹線ワイン男が話しかけてくる。ハゲ上がった頭まですっかり真っ赤になり、もう少し口が尖つてさえいればマンガのタコそのもので、僕はこの男に『還暦ダコ』の名を進呈した。「あなたはローザとはどんなご関係、いやご関係なんて、嫌らしい言い方だな、でも、どんな言い方をしたらいいのかな?」いや、思い切つて、もう聞いちゃおつ、どんなご関係?」「娘さんの友人です」

「洋子ちゃんの?」

「はい」

僕の答えを聞いて還暦ダコは怪訝そうに考え込む。

「洋子ちゃんの友人がここに来るの? そりや珍しいんじやないの? たぶん、そんなのあんた一人じゃないのかな?」

「そうだと思います」と僕はわざと不機嫌な調子で言つた。

「いや、ごめんなさい」と還暦ダコは僕のそばににじり寄り、真つ赤になつた手で僕の膝を軽く打ちながら「新幹線の中で、ワイン一杯だけつて思つてたら、次々空けちやつてね、もう酔つちやつてね、八本も空けちやつたの、八本。誰も止めてくれる人がいないもんだから、それに久しぶりの神戸なんで、ウレシクつてね。いえね、意外だつたんですよ、ローザの追悼集会にあなたみたいな若い人がいらっしゃるなんて、だから、失礼かとは思つたんだけど、ついね、聞いちゃつたつてわけだ。そうか、洋子ちゃんの友人ですか。そうですか……」

「おい、後藤!」と誰かが還暦ダコに後ろから呼びかけ、膝で歩い

て来て、「絡むなよ、若い人が驚くやろ」

そう言つて、今度は僕に、「

「お若いですね。ローザとはどんな?」

「それはもう俺が聞いたよ」と還暦ダコ。「洋子ちゃんの友人なんだって」

「ああ、洋子ちゃんのね」と納得したような納得しないような顔。

「いつローザに?」

「昔、洋子さんにお店に連れて行つて貰つたんです。その時に」「そりがとうございます。本日の集まりは、もう三十年以上前になりますが、ローザの政治活動時代に知り合い、強烈な印象を受け、影響を受けたものたちのなかでも、特に、後々までつき合いのあつた、篠原、佐伯、村山の三人が発起人になって開催したものです。それで、お願ひがあります。今日は、この会場では、ぜひ、皆さん、心を一つにして頂きたい。旧交を温め合つのは、この集会の後にして、ちゃんと、部屋も取つてありますので、そこでしていただきたい。

ここでは、ぜひ、発言者の発言に耳を傾け、決して、私語で声が聞こえない、などといふことのないように、お願ひしたいのであります」

「そりやおかしいよ」と宴会場の後ろの方からヤジが飛んだ。五十人近い参加者は皆そちらを見た。

これも還暦近いだらう男が立ち上がった。熊のよつた体格に肩までの銀髪を真ん中で分け、ブ厚い唇に鋭そうな目をして、見るからにウルサそうな風貌、まさに『還暦グマ』だ。

「何がですか？」と同会は憮然とした口調で還暦グマに返した。

「ローザはそんな堅苦しいことを望んだかな、ってことだ。きっとローザは、ここでみんなが旧交を温め、思い思いに楽しい時間を過ごして帰つていくことを望んでると想つんだ」

ソノトーリ、と、合ひの手が入つた。いつも合ひの手も久しぶりで、それが『その通り』だと理解するまで少し時間がかかった。「やめよつよ、こんなところでもめるのは」と今度は別の、これも還暦近いだろう女性が立ち上がり、還暦グマに食いかかった。「まずは黙祷でしょう」「黙祷？ 黙祷なんかするの？」と還暦グマ。

「悪いの？」と女性。

「日の丸と君が代は悪くても、黙祷はいいのか？」

「対象が違うでしょ」

「でもやることは同じだろ？」「同じだろ？」

「まあまあ」と同会がマイクを通して。「今日はお互いの些細な主義主張は出来るだけ押さえていただきて……」やつですか、黙祷も問題ありとなると……」

「問題ねえよ」と還暦ダコがヤジを飛ばした。「やりてえやつだけ、やつたらいいんだからよ」

「ソウヨ」と、どこからか女の声が粗づちを打つた。

「それでは、有志のみということで、黙祷！」と同会はこきなり言った。

僕は正座して目を閉じた。

*

「今日、私の本当のお母さんと、会つてみん？」

あの春の日、ちょっと拗ねたような、何かを隠してることを入れかすよつないつもの言い方で洋子は言った。

「本当のお母さん？」と僕は、当然、聞き返した。

高二になつたばかりの春、サークルも引退し、そろそろ本気で進学先を決めようとしていたころだった。僕と洋子は淡い抱擁を知り、

それでもキスはまだとこづ微妙な関係だつた。

「本当のお母さん？」と、僕はまた聞いた。洋子が返事しなかつたから。

「みんなには、絶対、秘密よ」

そう洋子は言つたけれど、本当のお母さんがいることが秘密なのか、その本当のお母さんにこれから会つことが秘密なのか、僕にはわからなかつた。それに、本当のお母さんがどこかにいるとするなら、今の洋子のお母さんは一セモノなわけで、一セモノにさえ会つていないので本物に会つていうのは、これは順当なのか、逆なのか、とまあ、そういう愚にもつかぬ考えが巡り巡つて、僕の十七歳の頭は混乱した。

「なんで？」と僕は聞いた。

「秘密やから、やんか」と洋子は言つた。

「秘密つてことやなくて、なんで僕に本当のお母さんを紹介するんや」

「紹介したいから、やん

「ぜんぜん、わけがわからん」

「実は、昔から約束しどったんや。ボーイフレンドが出来たら、だれより先に紹介するつて。やから、ええやる」

「うん」と言いながら僕は逡巡した。もともとラブレターのやりとりとかで始まつた関係じゃなかつたし、好きの嫌いのと言つたこともない。ただ、いつの間にか一緒にいる時間が長くなり、ちょっと触れた指の先にふれあいというものを知り、つい一週間前に抱擁を知つただけだつた。恋人同士なんて意識はもちろんなかつた。世間で言つ、ボーイフレンドとかガールフレンドとか、その手のなんとなく生臭い言い方も僕らにはそぐわないような感じだと勝手に思つていた。

それが、いきなり今日、洋子の「ボーイフレンド」として、それも「本当のお母さん」に紹介されるのだといつ。気持ちの準備が出来ない、なんでものじやない。一体何が起つたとしているのか

さっぱりわからず、僕はただ「うん」と答えて逡巡するほかなかつたのだった。

そして逡巡を抱えたまま連れて行かれたのがローザの店だった。

僕とローザとの、運命的と言つていい出会いだった。

*

「ローザとの出会いには様々な形があり得たでしょうが……」と一杯の音頭をとる役の、これは完全に還暦を過ぎたと思われる初老の紳士がマイクに向かつた。「その出会いをずっと大事にして、今日も、そのまま現役でいらっしゃる方が何人か見えられているとのことで、もう現役ともなれば、これは国際情勢から始まって、国内情勢、それから主体の状況を経て政治方針にまで至る、緻密な分析が必要になつてくるのであります。そのようなことをいたしておりますと、せっかくのこのビールの泡が、さながらウタカタのごとく、消え去つてしまつでありますから、ここは簡単に二点だけお話ししましょう。ワタクシがローザと知り合つたのは、というより、ローザが、私たちのやつておりました反戦系の社会科学研究会、略して反戦社研ですが、そこに顔を出したのは、忘れもしない、一九五九年の八月二十四日であります。午後三時二十四分頃だつたと記憶しております。本当に、このご遺影からは想像も出来ないよう、本当に華奢なお嬢さんで、そんなお方が、我々のようなむさ苦しい男ばかりの社研の部屋にいきなり入つてこられて、ワタクシは、これは何か道に迷つたか何かで、道でも聞きに来たんだろうと、そう思つたものであります。ところが、いや間違いやない、このビラを見て來たんだ、と、当時ワタクシらが撒いたビラを手にしておられまして、それで話を致しておりますと、実に素晴らしい感性を持つておられる。国際情勢についてもよく存じで、我々に、さあ、あなた方学生はこれからどうするんだ、などと議論を吹きかけてこられまして、こちらとしても、これは面白いことが始まつたぞ、てなわけで、談論風発、それこそ、ローザが、当時沈滞氣味だったワタクシたちの反戦社研に、新しい風を吹き込んでくれたのであり

ました。それで、こんなお嬢さんに、こんな汚いボロ部屋にいつまでもいて貰うわけにはいかないというので、それから喫茶店にローザを誘ったのであります。ローザは、最初、断りました。喫茶店になんか、行つたことがない、恥ずかしい、などと、ちょっと拗ねたようにおっしゃるわけで、さつきまで、むくつかせ男たちを相手に一歩も引かなかつたアマゾネスが、今や、昔風の言い方で、ここに「」参考なさつていらつしやるような意識ある女性方には失礼を申しますが、それこそおじとやかな大和撫子に化けてしまつたわけで……

「あのー」と会場の中から、とても「おじとやかな大和撫子」とは思えぬような、女性の甲高い声がした。「ビールの泡、消えそなうんですけど」

「は?」と初老の紳士には、女性の発言の意味が飲み込めていよいよだつた。「その大和撫子の部分を見せて、これでローザは、我々の心をしつかりとつかんでしまつたのであります。のちのち、ルーテ・ローザとして名を馳せる……」

「あのー」とまた同じ女性の声がした。「ビールの泡、完全に消えてしまうんですけど」

「あ、ああ、そうですね」とやつと紳士も気付き、「では、献杯!」

「けんぱーい!」と会場も遺影に杯を捧げた。

「で、ありまして」と、献杯のコップの縁に口を付けただけで、紳士はまだ話を続けるつもりでいるらしかつた。会場に軽い失笑が漏れた。

司会が紳士に歩み寄り、その耳元に口を寄せた。

「いや、たつた三点だけやて、そんな長い話やあれへんて……」と紳士の喋りはマイクを通して会場にモロに漏れ、さらに失笑をかつた。

司会はまた紳士の耳元に口を寄せた。

「いや、やから、今話しどのは、一 点目の話の導入や、これから

六〇年安保闘争の「テモの時の、例の話に入つていくんや。そないに長い話やあれへんて……」

仕方ない、話させてやろう、という雰囲気が会場にも漂いだした。「それでは皆さん」と司会者はマイクを通して、「斎藤先生のお話を伺いながら、料理の方、始めて下さい。お酒は飲み放題ですので、ビールからお湯割り、水割りまで、ご自由にして注文下さい」

「あの人は昔から話が長いんだよ。なんで斎藤さんに献杯の音頭なんかやらすかな」と還暦ダコは僕にビール瓶を突き出しつつ、「大学の先生なんてやってりや、挨拶も長くなるつてもんだろうが、限度があるつてものさ、そう思うでしょう」

軽くうなづきながらコップでビールを受け、回りを見れば、誰一人、と言つていいくらい、紳士の話を聞いている人はいない。

コップに口を付けて、今度は還暦ダコに注ぎ返そうとすると、

「いや、私はもうこれですから」

見れば、水割りのグラスを手に持つている。

「いえね、もうワインをハ本も飲んじやつたら、ビールなんて水みたいなもんでしょう。さつき仲居さんに言つてね、水割りのグラスに水で割らずに持つてこいなんちつて」

「おいおい」と隣で別の人と話を始めた還暦ナマズが還暦ダコをたしなめる。「また若い人に絡んでないか」

「いいえ、そんなことないです」と僕は還暦ナマズに答えるながら、仲居さんが鍋の用意を始めるのを眺めていた。いや、仲居さんの向こうに見えるローザの遺影を眺めていた。黒い四角い枠にはめられたただの太つたオバサンの笑みが、ローザの不在の確固たる証拠としてそこにあつた。ローザは死んだ。ローザはもういない。なのに、なぜ、どうして、誰も、ここで涙を見せないのか。

*

会場は次第に乱れ、それでも紳士の挨拶はまだ、六〇年安保闘争の戦後史的意味が云々の周辺を延々と巡っていた。心を一つに、などと言つていた司会さえ、もう会場に降りてきて還暦グマとさしつ

さされつ哄笑を交わし合い、紳士の方を見てもいない。会場に旧交を温める者の一人としていない僕はただ仕方なく紳士の話を聞くふりをしながらローザの想い出に涙をこらえた。『偲ぶ会』なのになぜ涙をこらえなくてはならないのか、などと理不尽の想いに堪えながら。

*

ローザに初めて会ったあの春、僕は高二になつたばかりで、もちろん将来のことなど何も考えていなかつたし、進学先さえ決めていなかつた。文系を選んだのもただ数学が苦手だつたから。実際、当時の僕の通つていた公立の普通高校ではそういう消極的な進路選択をする生徒が過半だつたと思つ。だから、「これからは遺伝子工学の時代や」などと言いつつ、高一の春には早々と生物工学を志望していた洋子は異様だつた。と言つより、洋子という存在自体が異様だつた。

異様と言えば、小学生の洋子はさらご異様だつた。小学校三、四年のころも洋子と同じクラスで机を並べていたのだけれど、僕もまた他のクラスメートと同じく、この奇怪な少女の奇矯な言動に辟易して、ただもう、ひたすら無視していた。洋子はイジメの対象ですらなかつた。敬遠でもない。ほとんど純粹に忌まれていた。

たとえば国語の時間、先生が洋子に朗読を当てる。それだけで皆に緊張が走つた。洋子の読み方はとても普通なんでものじやなく、言つてみれば奇妙に上手すぎたのだった。洋子は文節ごとに抑揚を付け、形容語には感情を入れ、会話の「」の中では声色を使い分け、まるで一人芝居のように読むのだった。しかもどんな難しい漢字も読みこなし、すらすらと、とぎれることなく読む。それが小学生の耳には極端にサツるのだった。

ヒョウキンをもつてなるある男子など、洋子が読み始めると、「うあー」と耳を塞いで机に伏して、教員に叱られたりする。

実際、洋子の朗読は、生で聞くには、実に聞くに堪えがたいものがあつたと思つ。

あるいは、体育の行進の時。

手の振り上げ方、脚の蹴り出し方、顔の向き、視線、すべて、どれもが型にはまつたように直線的で、市民のパレードに一人だけ軍人が紛れ込んでいるかのように、奇怪だった。

そして先生は、朗読も、行進も、洋子を手本にしろ、と言つのだつた。生徒たちも、もちろん、先生の言つ通りにやつたら洋子になることはじゅうぶんわかっていて、だから洋子が手本だといつことじゅうぶんわかっていて、それでも実際にはテレやハニカミだとじゅうぶんわかっていて、それでは洋子のようにはやれないわけで、それを臆面もなくやつてしまえる小学生の洋子はやはり異様だった。

高校で再会したときには、すでに洋子はその異様さを一種の個性にまで磨き上げ、一種の洗練にまで至つていた。でなければ親しくなどならなかつたらう。

*

つき合ひの始まつた高三の春、『ローザ』まで洋子に引っ張られて行くと、まったく、『ローザ』などというハイカラな名前とはおよそそぐわぬ、戸板にゴロゴロと野菜が投げ出されただけのようなくきたならしい八百屋だつた。カンバンからして、『産直の店 ローザ』と、ベニヤ板にマジックで書いてそこに立ててあるだけ、しかもその文字がまた、これまで見たことのないほどド下手だつた。洋子の横で、なんと言つていいかわからず突つ立つている僕の様子を面白がるように、

「店も、野菜も、カンバンも、信じられん、汚いやろ」と、店頭の水道の蛇口に座りこんで里芋を洗つていたネエちゃんは言つた。

僕は何とも言いようがなく、店の前に立ちすくんだ。

ネエちゃんは立ち上がるなり、

「ボーリフレンドか?」と、洋子に向かつて言つた。

「うん」と洋子は返した。

「H-H子そーやな。あんた、幾つ?」

「ローザ、同級生や」と、洋子はローザに向かつて言つた。

「やつたら、十八か？」

「まだ十七です」と僕はこの奇妙なネエつけんに言った。

「十七か……私が洋子を身にもつた歳や」

そう言って、ローザは僕の肩を親しげに叩きながら笑った。

「あ、ごめん」とローザが言つのを見ると、叩かれた制服に土が付いていた。その土を、ローザはまた土のついた手で払おうとして、制服にさらに土を付けた。

「ローザ、ワザとやる」と洋子は責めるように叫んだ。

「そんな、ワザとやあれへんて。しじうがない、ちょっと、上がつて、上で脱いでもらうて。これは濡れ雑巾で落とさんとあかん」

「あかんて、上に上がつたら、ズボンまで何もかんも土だらけになるやん」

そういうて洋子は自分のハンカチを蛇口で湿し、僕の制服の肩に当て、パタパタと土を拭つた。その間、ローザは僕をじっと見据えて笑んでいた。髪はショートでボサボサ、しかも薄く土にまみれており、体つきが小柄なのも相まって、まるで飢えた少女に食べ物をねだられているような、奇妙な感じだった。

「ええよ」と洋子が言った。肩の土のほとんどは落ちていた。

「あんたが来るつてわかつとつたら、上も片付けとつたんに。上でお好みでも焼いて、一緒に食べて行きや……」

「言つて来たらやうなるやうから、こきなり来たんよ。今日はもう、すぐ帰るからな」

「あんたもネエちゃんに似て、イケズになってきたな。あ、そりや、名前と連絡先、聞いとこか。何かあつたときにな」

ローザは台の上にあつた紙と鉛筆を僕に差し出した。

「ローザ、それ強引すぎるで」と洋子は言った。

*

「……まずは有無を言わぬ強引であります」と、例の紳士の話は十分近く続いていた。「たとえば集会参加者の中で、これは見所がありそうだ、となると、ローザはもう、ピターッとそばについて

離れません。それで名前と連絡先を聞き出すわけです。で、私たちも一緒にその目当ての男の所へと押し掛けていて、情勢論から、人生論から、やりだすわけです。それでもう、ローザの舌鋒の鋭さは、相手に逃げ出すスキを与えないわけで、

『アナタはこの国の政治をどう思つていいか?』
と、バーンと、いきなりこう来る。

『よくないとと思つ』
『つ』

なんて返そうものなら、

『このまままでいいと思つか?』
『思わない』

『それならどうしたらいいと思つか?』
『なんとかしたいと思つ』

『一人で何が出来ると思つか?』
『わからない』

『そうやって何もせずにいることは現状維持といつ罪を犯しているとは思わないか?』
『わからない』

『わからないでいることも一つの罪だといつ意識はないのか?』

これでもう、たいていの男はイチコロで落ちるわけです……
笑むわけです。それはもう優しく、優しく、包み込むよつて。それで、

『ひとりで考えていても仕方ないし、一緒にやるつよ、みつ』
これでもう、たいていの男はイチコロで落ちるわけです……
「オルグなんて言つたって、若い人にはわからんでしょう?」と還暦ナマズが、紳士を無視しながらビールを注いでくる。それをちょっと飲み、

「わかりますよ。僕らの頃にも少しだけだけど、運動は残つてしまつたから」

「でも、あんたらの頃の運動はもつ……」と還暦ダコが横から口を挟んだ。「むちゅくちゅだつたでしょ?」そりや、僕らの責任でも

あるんだけどね」

「そりやで、ワシらの責任もあるで」と還暦ナマズ。「ワシらの中にあつた対立とか、感情的なしきりとか、そういうんが、そのままで若い人らに引き継がれてもうて、増幅していくて、あんなにわやくちゃになつていったんやと思つで」

「今日は現役の方も……」と僕は少し周りを憚つて言つた。

「何が現役や、かめへんて」

「あんた若いのに、よく氣が付くね。さすが洋子ちゃんの友達ってなもんだな、で、あんたとローザは何回ぐらい会つたの？」

「十回位、ですか」と僕はウソを言つた。

*

初めて会つた日、おみやげ、とローザから手渡されたのは網袋に入つたタマネギだつた。洋子と付き合つてることをえ親には黙つているのに、こんなものを持って帰つてなんと言えばいいのか。そのとまどいを見透かしたよう、ローザは、

「友達のお母ちゃんがくれたつて言つたらえよ。ガールフレンドの親からもうたなんて言つたら、卒倒する親もあるかも知れへんもんね。あ、それ、無農薬の自然栽培やで」

「農薬使つてないんですか？」

思えば、その時の僕の、こういう素朴な驚きがローザは嬉しかつたのだろう。ローザの喋りを誘発してしまつたらしく、立ちっぱなしで、ローザの雄弁を聞くハメになつた。

「農薬が毒だつてことは知つてはるよね？」

「ハア」

「食べ物と毒が相容れる思つへ」

「思いません」

「やから、食べ物を作るのに毒は使わへん。簡単やろ?」

「でも、それで農業が成り立つんですか?」

「ローザは実に嬉しそうに笑んだ。

「いい? 農業なんていつてるけど、農薬を使つてやる農業はもう

農業じゃないんよ。あれは工業の一部なんよ。水田なんて言つてるでしょ？ とんでもない。あれは、私に言わせれば油田よ、わかる？」

「わかりません」

「ガソリンで耕して、ガソリンで草取つて、ガソリンで刈り入れて、ガソリンで干して……石油がなかつたら成りたたへんでしょう。だから石油をジャブジャブつき込んでるつて意味で、あれはもう油田と言つほかないんよ。油田で作られてるものなんか、農産物やない、あれはもう工業製品や。農業やない、工業や」

「ローザ！」と洋子は遮つた。

「ええやんか。せつかく話をじとるのに」と洋子。そして、

「ね、ええやる」と僕に。

「は」「と僕は仕方なく。

「やからね、油田になつてもうて、畑や田んぼの土そのものが駄目になつとるんよ。そんな駄目な土で作つとる野菜が害虫なんかに抵抗力があるわけないわ。だから大量に農薬がいるんや。昔の野菜に比べたら、野菜のビタミンも減つとるでえ。昔の野菜と今の野菜と、似て非なるもんやと思つた方がええ」

「そりなんですか？」

「たとえばな……」とローザは台の上の本を開いた。乾いた土が埃となつて舞い、それを手で払いのけながら僕の前にその本を差し出し、差し出しながらローザ自身もスリ寄つてきた。本を覗き込む僕の肩にローザの肩が触れた。

「ほら、ホウレンソウの畠を見やひ、十年前ビタミンじがど位減つとるか比べて見てみ……」

僕の顔のすぐ近くにローザの顔があり、洋子と抱き合つときも一緒にキスした。

「ローザ！」と洋子は苛ついた口調で言つた。「わづええやんか。別にそんな話し聞きたんやないから。もづ帰るで

「やつたら、孝弘君、またお出でな。洋子のボーイフレンドやから、

安くしようと。インスタントな食べ物をばっかり食べとつたら、ア

カンで」

ローザは僕の肩を叩いて、「おうど、いつやアカンな」と
言つてやめた。

その帰りにお好み焼き屋に寄ると、とつぜん話題はローザのこと
だった。

「ローザって言つてお母さん？」

「若い頃からのあだ名やねん。私も昔からローザって呼んでたから、
お母さんなんて感じはせえへんのよ。私にとって、お母さん言つたら
ら、今のお母さんでしかないわ。なんか、ローザは昔からローザっ
て感じ」

洋子はお好み焼きをひっくり返し、上から口元でグイッと押され
つけた。最近知った洋子の癖だった。

「離婚とか、そういうの？」

「ちやうぢやう」と洋子は言つた。「やうよとい、やのわい、やや
ここの説明になるんやけど、聞く気ある？」

「あるけど」

「でも、今日は、私の方が話す気になれへん。ま、いつか、な」

*

やつと献杯の紳士の挨拶が終わつて司会にマイクが帰り、『懲ふ
会』の本来のプログラムが動き出す気配があつた。けれど、もう会
場は「心をひとつに」どころではなく、あちらで喚き、こちらで叫
び、哄笑と、爆笑と、ドラ戦と、ダリ戦と、甲高い笑い声とで乱れ
に乱れていた。

司会はマイクを通して、

「斎藤先生の、実に、先生の記憶力の物凄さを我々に再認させてい
ただいたよつな」挨拶でありました。それでは時間もおじつおりま
すので、当初のプログラムに入らせていただきまわ、……」

だれも聞くものなどいな。

けれど、洋子が席から立ち上がりて壇上に近づくと、それに気づ

いた会場の前方から順に拍手が起き、その拍手の波は次第に広がつてやがて会場を呑み込んだ。拍手を浴びながら洋子はある種の風格をまとめて歩いていて、その迫力に僕は呆気にとられながら、皆と一緒に手を打った。

マイクの前に立つ洋子がグルリと会場に視線をやると拍手は止み、天井からは水を打つたような静けさの幕が降りてきた。十幾つの鍋のクックツいう音と仲居さんの足音だけが聞こえた。

「今日は、母のためにありがとうございます」

そう言って洋子は頭を下げた。会場の皆さんも頭を下げた。

「母は、いえ、私にとつても、母は『母』と言つよつ、皆さんと同じ『ローザ』でしたから、これからも私は『ローザ』と呼ばせていただきます」

異議なし、と男の掛け声が飛んだ。

「私は、ローザを憎んでおりました」

洋子は「異議なし」男を睨みつけるように言つた。会場が張りつめた。

「今日のプログラムは、実は私の挨拶のみしか決まっておりません。どなたかが言われましたように、ローザ自身も、きっと、皆さんがここで旧交を温めあわれ、楽しい時間を過ごして帰つて行かれることを望んでいると思います。ローザの想いを汲めば、むしろプログラムなどない方がいいと思います。でも、私には、それでは納得が出来ないです。私の、ローザに対する想いをここで皆さんに知つていただきたい。知つて欲しいのです。……私はずっとローザを憎んでおりました。いえ、今でも、多分心の奥底では憎んでおります。皆さんご存じの通り、私は自分の本当の父親が誰であるのか知りません。きっと、ここにいらっしゃる方のうちの誰かではないかと思われますが、もうそんのはどうでもいいことです。私の父は、私を育ってくれた山内祐蔵以外にはおりませんから。でも、私は、私をこういう複雑な境遇においてしまったことに対しても、一言でいい、たつた一言でいい、詫びの言葉を、ローザから聞き出したかった。

「ごめんね、の一言でも聞ければ、それでよかったです。けれど、残念なことに、聞けませんでした。私と共に十年にわたる闘病生活を送りながら、多分、ローザは思うところのすべてを私にさらけ出し、ぶつけてきたことだと思いますが、それでも、私に対する詫びの言葉であるとか、あるいは、感謝の言葉など、何一つ、一言もありませんでした。ただ、ただ、思うところを要求し、要求が通らなければ「オネ、周りにどんな迷惑をかけても自らの要求を非妥協的に貫徹し、徹底していくところは、死ぬまで変わらなかつたと思います。……本当に、以前は、私の人生、いえ、私が生まれたこと自分が間違いではなかつたのかと、いつも考えておりました。私の人生など、ローザの奔放な生き方の不幸の集約ではなかつたのか、と。本当に、亡くなつてからも、ローザの生き方や考え方を納得できたとはとても言えません。小さい頃から、亡くなるまで、本当に、ローザは私の疫病神でした……」

誰かが咳をした。軽い咳だったのに洋子の話はどうぞれ、会場全体は咳男を冷たい視線で突き刺した。

「小さい頃の私は、ローザがなぜそこにいるのか、全く理解できませんでした。いえ、理解したくありませんでした。ローザさえいなければ、私は普通の家庭の、普通の女の子を裝つことが出来たからです。私の本当の母は、ローザの姉に当たる美枝ひとりだと今でも思つてあります。父親も、もちろん、祐蔵だと思つています。本来ならいとこに当たるきょうだいたちも、私にとつては本当のきょうだいです。ローザさえくつついでさえいなければ、私の家庭は、普通の、何の変哲もない、「よくノーマルな家庭だつたのです……」

「ただ静かだつた会場の空気は、洋子の話に極端に張りつめてきました。皆さんもご存じの通り、私はハつの頃までローザと一緒にコミューンにいました。なぜあのようなコミューンが出来たのか、皆さんの方がご存じですか、繰り返しません。ただ、私にとつては、あのコミューンで育つたということが、それからの人生に、もう、計算知れない、暗い陰を落としたのです。コミューンを作るのも、作

つた「ミュー」ンをメンバーたちのイザ「ガ」で壊してしまったのも、それはそれで、メンバーの勝手です。関係のない外部の人間がとやかく言つようなことではありません。でも、私のように、自分の意志で「ミュー」ンに入ったわけではなく、自分の意志で抜けたわけでもない人間から言えば、ローザや、その仲間たちは身勝手すぎました。いえ、身勝手などという言い方はやめましょう。の人たちは、きっと幼なすぎたのです。年齢的なことを考えても、十代後半から二十代前半なんて、いつたい世の中の何が見えていたと言つんでしょう。何も見えていない分、きっと純粋だったのでしょうか。ローザや仲間たちは、世の中は自分たちの思うように変え得るし、変えなければならぬと真剣に考え、世界の変革の拠点である「ミュー」ンを作つたのだと聞いています。その意氣や良し、としましょう。けれど……」

僕にとっては、そしてもちろん会場の皆さんにとっても、きっと、よく知つてゐる話ではあつた。けれど、会場の皆は洋子の口からいちどきにこりやつて聞くのは初めてだつたのだろう、司会が言うまでもなく、会場は心を一つにして洋子に聞き入つていた。そして僕はと言えば、話の内容より、洋子のたくましい変貌ぶりに驚かされ、会場と同じよう、この話にのめり込んで聞き入つていた。

*

けれど、試行錯誤が許されることと、許されないことがあります。一度しかない幼少期を、そのような幼稚な「ミュー」ンで、幼稚な教育理論で、幼稚な大人たちから育てられた子供がどのようになるか、想像してみてください。

まずは、「ミュー」ンの理論では、「ミュー」ンは一つの大きな家族だとされました。だから、すべての大人が親であり、すべての子供は共通の子供でした。子供たちは、お父さんをお父さんとは呼ばず、お母さんをお母さんとは呼ばず、皆、それぞれのニッケルネームで呼びました。だから、私が今、ローザのことを「ローザ」と呼ぶのも、その名残なのです。

でもちょっとと考えれば解るように、「コミニューーンが一つの大きな家族になるなんて、あり得ないでしょう？」大食堂でみんなで食事をとつたり、子供部屋大人部屋でザコネしていくも、やっぱり自分の子供は他の子供よりもかわいいし、自分の親を他の大人と区別するのも、人間にとっては当然だと思うのです。けれど、その「自然さ」こそ、コミニューーンの大人们は問題にしたのでした。自分の子供を自分のモノにするところから私有財産制度が始まるんじゃないか。だから、共産主義を目指す以上は、子供からまずは共有しなければならない。子供が共有なのだから、当然、子供にとっては大人全部が親である、と。実にスッキリとした理論で、理屈では正しいかも知れません。けれど、理屈では割り切れないからこそ、人間は人間なのではないでしょうか。

今でも憶えていますが、あるとき、子供たちの一人が大喧嘩をして、一人がちょっととした怪我を足に負いました。私たち子供はその子を連れてその親のもとへ行きましたが、親は「薬は医務室にある」とそれだけでした。子供が薬を求めて来たんじゃないことは百も承知で、そして自分の心の痛みも押さえて、この女性は「薬は医務室にある」と冷たく言い放つたのでした。今でも、私は、この女性の様子を目に浮かべることが出来ます。顔は心配でひきつっているのに、口では冷たく、薬は医務室、と言うのです。この、表情と言つてのこととの矛盾が、コミニューーンの失敗をなによりも雄弁に物語つていてると思います。

*

話を聞きながら、僕は小学生の洋子を思い浮かべた。

ある時、洋子が、教員から、何かの物語の感想を求められ、

「この主人公は、実にブルジョア的だと思います」

「もう少し詳しく説明して」と言う教員に向かつて、

「ブルジョアも知らないんですか」

「うん、先生、よく知らない」

「ブルジョアも知らない人が先生をしてるんですか」

「『めんなさいね。でも、本當によく知らないの。ブルジョアって、何?』

「ブルジョアとは、支配階級のことです」

「支配階級って?」

「この世は、支配する側とされる側で作られていて、支配するのがブルジョアで、支配されるのがプロレタリアです」
いつもやつていつも繰り返されるやりとりに、もう教室には失笑が始まっている。

「で、どうしてこの主人公がブルジョア的なの?」

「お金儲けしか考えていないからです」

「お金儲け?」

「金銀珊瑚つて、お金と同じだと思います。主人公は金の亡者です。資本家の卵です」

「お金持ちはいけないの?」

小学生の洋子は芝居がかつた、『啞然!』とでも言つよつた仕種をする。

「良いわけがありません。搾取した上に成り立つ富は人民に返さなくてはなりません。資本主義のイデオロギーをこの物語は振りまいています。私たちはこのようなイデオロギー攻勢に負けないようにしないといけません」

*

『ミコーンのモデルが何だつたのか、よく調べないと解りませんが、多分、初期のソ連だと、中国の大躍進とか、そのあたりだつたのではないかでしょうか。もちろん、ミコーンそのものは本家原本よりはずつと幼稚だつたとは思います。だからまだ救いもあつたのでしょうか……。

私たちの日常は、農作業と、演劇と、ダンスと、イデオロギー闘争とで明け暮れていました。演劇は、初期のソ連の児童劇の翻訳ものや、日本の古いプロレタリア演劇のものなど、今考えただけでもうんざりしてしまうような作品ばかりでした。こんなものを、毎日

毎日、練習していたのです。もちろん、おかげさまで、社会復帰してからも国語だけはいつも優秀な成績で過ごすことが出来ました。だつて、今は使われていらないような難しい漢字をも、本当に小さい頃から読みこなしていましたから。

それからイデオロギー闘争。というよりも、これは口げんかの稽古に過ぎませんね。口げんかとも言えないかもしません。とにかく相手に「ブルジョア的」のレッテルを貼つて黙らせてしまえばそれでいいわけですから。こういう議論を、容赦なく、仮借なく、徹底的にやることを、コミュニケーションでは教わりました。もちろん、これは社会復帰しても何の役にも立ちませんでした。むしろマイナスの遺産だったと思います。

とにかく、そういう世界だったのです、コミュニケーションとは。で、ある日、崩壊しました。コミュニケーションの置かれていた地域の人たちとは、非就学児童の問題などもあって、もともとトラブルが絶えなかつたことは想像に難くないですし、内部でもセックスの処理の問題などでかなりトラブルを抱えていたらしいことも後で知りました。最近調べたのですが、コミュニケーションが崩壊した後のマスコミ報道、まるで、フリーセックスを教義とした邪教集団の自滅、みたいな報道、あれもあながち事実無根ではないな、という気もします。

今でも憶えています。紅葉も盛りを過ぎた晩秋、コミュニケーションのあつた山の斜面に続く急坂の道を、落ち葉を踏みしめながら、今の父母に連れられて降りました。私は悲しかつた。友達が一人去り、二人去り、そしてついに私も出していく日が来たのに、ローザは私と一緒に来てはくれなかつた。後から聞けば、父母が奪い取るようにして連れて出たらしいのですが、私はローザに裏切られたと思いまし。ローザはこつそり私にだけお菓子をくれたりしていたのに、肝心なときには一緒に来てくれなかつた。ローザ、なぜここにいないの、なぜ私のそばにいてくれないの、なぜ私だけをブルジョアの世界に放りだしたの？ ローザを失った悲しみは世界への怒りに変わりました。私はブルジョア世界そのものと、たつた一人の闘いを始

めたのです。

このブルジョア世界と闘い続けていれば、そうです、非妥協的に、徹底的に闘い続けていれば、いつかこの世界 자체があの懐かしいコミニューーンのようになるんだ、そうなつたらローザが迎えに来てくれるんだ、と。もちろん、ここまでしつかりと考えていたわけではありません。愚かな八歳の子供のことですから、コミニューーンでやつていた通りを繰り返していただけなのでしょう。ただ、それがいかに異常な行動だったのか、想像できますか？もし想像できなければ、今日はその証人もお呼びしていますので……

*
いきなり洋子は僕の方にしつかりとした視線をくれた。会場の皆さん、自分たちとは異質な人間が一人だけ混じっていることに最初から気づいていたらしく、一斉に僕の方を見た。何か発言を求められるのかと身構えたけれど、単に注意を喚起しただけらしく、洋子は話を続けた。

……後でお暇だつたら話を聞かれたらと思います。

社会復帰して、私にはすべてが敵でした。私のいとこたち、今では本当のきょうだいだと思つてますが、姉が当面の敵でした。家に入るなり、私は姉がスカートをはいているのをまずは攻撃しました。お笑いですが、コミニューーンでは、スカートは男が女にはさせた屈辱の印だと教えられましたし、そしてそのようなブルジョア文化とは徹底的に闘うことと教わつてきましたからね。

姉は最初、ポカンとして、そして自分が攻撃されていることを知つて、静かに泣き始めました。

「泣くなんて！ それこそブルジョア的だ！ ブルジョア女のすることだ！」

と、私は、姉の涙を見ても攻撃の手を弛めませんでした。

どうやって父母が議論をやめさせたのか憶えていません。きっと父母も、ここまでひどい子供だとは思わず引き取ったんだろうと

思いますよ。本当に、今考へても、私の父母の根氣には頭が下がります。ローザと三つしか違わないのに、母は本当に大人でした。母からはもちろんぶたれたこともないし、激しく叱られたこともあります。

それに、後で知ったことですが、私にはその時戸籍さえなく、もちろん通学経験さえありません。そんな子供を学校に入れる手続きがどれほど大変か、今の私にも想像することさえ出来ません。ただ、母は、毎日毎日役所をたらい回しにされて、本当に大変だった、と笑いながら話します。そして、ある日、家に見知らぬおじさんがやつて来ました。それで、私に、おじさんの持ってきた何冊かの本を声を出して読むように言いました。私は「ミニコーンでやつていた通り、演劇の訓練通りに読みました。おじさんが感激しているのが子供心にもわかり、嬉しかったことを憶えています。あとは算数の簡単な問題を出されて、これももちろんクリアしたのでしょう。じゃあ、来週から学校に行こうね、と言つておじさんは帰つていきました。ずっと後から聞いた話では、おじさんは教育委員会のお役人さんで、あの時は、本当に私という子供がそこにいるのかどうかといふことの確認にきたのだそうです。戸籍がないのですから、本人がそこにいるかどうかは見に来なければわからんからね。

今では私にも戸籍があります。でもこの戸籍を作るのは、就学よりも、もっと大変だったと聞きました。なぜなら、ローザは私を学校に行かすのは認めましたが、戸籍を作ることには猛反対したからです。

「それは私の負けになる」とローザは言つたそうです。「戸籍は天皇制維持の道具だ。臣民の登録簿だ。そんなものに私の娘を載せられるか!」と。

言いたいことは理解できます。でも、だからといって、私を巻き込まないでよ、という感じです。アナタの鬭争と、私の人生とは何の関わりもないでしょう、と。

まったく、戸籍が無いせいで、健康保険に入るのも一苦労だった

と母は言っています。ところがローザはといえば、身分関係を登録する戸籍と、住民サービスのためにある住民票は別物だから、役所に交渉して住民票をまずは作らせたらい、住民票があれば健康保険にもスッと入れるはず、などと、まるで高見の見物のような口調で「ミコーンの後始末に励んでいたというのですから、何をかいわんやです。

母によれば、住民票を作るのに三ヶ月かかったそうです。ほぼ毎日役所の窓口に通い詰め、冷淡な役人たちを叱りとばし、市の助役にまで会って、それで、いつさい口外無用ということで、やつと住民票が出来たのだと言っています。それでローザはと言えば、

「ほら、私の言うた通りやつたやろ？」

ですって。ローザらしいといふか、なんといふか。

戸籍が出来たのは、それから何年かたって、父母が一計を案じて、私の小学校卒業祝いにみんなでハワイ旅行に行くことにして、バスポートを取るために絶対に戸籍が必要だから、ということでローザを口説き落としたのだと聞いています。もちろんその頃にはもうローザもかなり丸くなっていて、「戸籍の差別性が云々」などとツベコベ言わず、それまで出生届を出していなかつた罰金とか、そういう手続きをしてくれるんなら、自分は判子だけは押す、と、そう言つたそうです。これで、生まれて十数年経つて、やつと私は自分の戸籍を得たのです。もし戸籍を得る前に死んでいたら、最初からいなかつた人がやっぱりいませんでしたってことになつたんでしょうか。

そのころローザがどこで何をしていたのか、詳しいことは知りません。ミコーンの外で知り合つた男性と一時同棲していたとか、住み込みで働いていたとか、ずっと後になつて聞きました。私や父母とは没交渉に近い状態だつたんではないでしょうか。

あの当時、私もだんだん父母に馴染んできて、ミコーンがいかに異様な所であつたかを理解し始めましたし、そして、その結果として、ローザという存在をなんとなく疎ましく感じ始めていました。

たのです。

だつて、考えてみてください。私に会いに来てくれるにしても、ローザつて、いつも、ものすごい身なりだったんですよ。化粧つ気が無いのはまだいいとして、着てる服はほころんでいて汚いし、靴には穴が開いてるし、ひどいときにはズボンのベルトの替わりに縄を巻いてたこともあつたんです。そんなのに連れられて遊園地なんか、喜んでは行けないでしょう。もちろん断るわけにもいかないし、会いに来てくれるのはやっぱり嬉しかつたから、一緒にきましたけど、私、もう、周りの視線が痛くて痛くて、もう少ししまともな格好をしてよつて感じでした。

*

洋子の語るローザの風貌は、僕と出会つた頃のローザそのものだつた。ただ、僕は他人だつたせいもあつたからか、あの風貌もローザに似合つたむしろ愛すべきものだと思つていた。

ローザに初めて会つた日から一週間くらい経つた下校時、

「たゞか、ひゞろ、くーん」

いきなり甲高い声で名を呼ばれ、驚いて振り返ると、道の反対側から、リアカーを挽く薄汚いネエちゃんが大根を持った腕を振つている。

「誰や?」と聞く友人たちに何と言つていいかわからない。絶対に秘密と言っていたし、洋子の「本当のお母さん」という以外、ローザについて、その当時の僕は全く知らなかつたから。

「八百屋さんや」と、友人たちにはウソでもホントでもないようなことを言い、こちらもおざなりに手を振つた。

「そつち行こかー!」とローザはまた叫んだ。これはタマランと思

い、「こつちから行きまーす」と叫び返し、友人たちには「そんなら、

また」とだけ言って横断歩道まで駆けだした。

これが運命の分かれ道だつた。ここでもしローザを無視していたら、あるいはローザが来るにまかせていたら。そのあと僕が『ロー

ザ』に行くこともなかつたるうじ、そこでローザに自然食を『ちそ
うになることもなかつたるうじ、食品添加物だのなんだのの本を借
りることもなかつたるうし、例のものをもらつこともなかつたるう。
とにかく僕は運命の横断歩道を渡つてしまつた。そしてローザは
と言えば、運命の女神よろしくやさしく笑みながら僕を迎えたのだ
つた。Tシャツの上に被つた薄汚れたコート、土にまみれたズボン、
ベルト替わりの荒縄……でも、その時の僕は何も驚かなかつた。僕
のとつてのローザがまだ、アカの他人だつたからだろう。

*

ローザには、中学の入学式には絶対に来て欲しくありませんでした。
た。新設校でしたから、校区の線引きの関係で、私は小学校時代の
友人がほんどいない中学に入学することになつていきました。だか
ら、新しい学校で、心機一転、コミュニケーションのこととか、ローザのこ
ととか忘れて、新しく出発しようと思つてましたからね。父母が話
し合つてくれて、結局ローザは入学式には来ませんでした。
そして、入学式には来ませんでしたが、そのひと月後、ローザは
とんでもない事件を起こしました。

ローザは当時、福井のアパートに一人住んで、水産加工品か何か
を配達する運転手みたいな仕事をしていましたのですが、それで、その
トラックごと中学に乗り付けたのでした。あれは昼休みでした。教
室で友達とお弁当食べると、廊下側の窓の向こうにローザが見え、
私は走つて廊下に出ました。ローザは私に、
「洋ちゃん……」と力なく言いました。

絞り出すような声で、様子も、そんなローザを初めて見るほど萎
れていきました。

「どしたん?」

「ちょっと、一緒に来てくれへん?」

ローザの言う「ちょっと」がどれくらいなのか、私の思った「ち
ょっと」とはかなりズレがあつたようです。弁当箱の蓋も閉じずに
放つたまま、それからの三日間、ローザと私とのセンチメンタルジ

ヤーーーが始まったのでした。

「ちょっと乗つて」と言われるままにトラックに乗ると、ローザはいきなり、

「私、死のうか思てんねん」
などと泣き始めるのです。

「どしたん？ ホントに」

「アンタ、これから私につきおつてくれへんか」

この状態で断れるはずがありません 私は心底驚いて、怯えてさえいましたから。だつて、ローザが、というより、大人の女性が泣いているのを私はこの時ライブで初めて見たのです。それで、学校からトラックを出すと、男にフラーた、もう私にはアンタしかおれへん、お母ちゃんを捨てんとつてな、と涙ながらに話し始めました。その涙のトラックに乗つたまま、そういう、今なら痴話とでも言つべき話を私に聞かせながら、福井までです。それで福井で荷物を積み直したころにはローザの元気も回復していて、そのまま私の下着とかの着替えも買い込んで一緒に東京へ車中一泊、それから青森に回つて一泊です。もちろん、楽しくなかつたと言えばウソになります。ちょっと羽目を外して友達と遊んでいるような感じで、楽しかった。忘れもしない、この旅行中、私は生まれて初めて唇に紅をさしました。父母の躰はわりときつちりしていて、子供が口紅なんてとんでもないつて感じでしたから。

私にとって、これが、社会というものに触れた最初の機会でした。それまで私は父の職場の人と会うこともなく、仕事がどんなものかも知ることもなく、ただ家の中で「子供」という役割を演じていただけだったのです。父母はきっと、私がきちんとした子供になるまで、社会からはできるだけ隔離しておこうと考えていましたね。今思つても、ちょっと閉鎖的な家庭だったような感じはします。だから、このローザとのセンチメンタルジャーーーも、本當なら、自分が初めて社会を見たという成人旅行みたいな感じで、いい想い出を抱えて帰宅できたはずなのです。実際、東京や青森の居酒屋で、

まるでアイドル的な存在だったローザにくつづいて、違った言葉で
ガヤガヤと揉まれながら、恐ろしくもあり、楽しくもあり、旅自体
は本当にいい想い出ばかりでしたから。

今でも思い出します。家のそばの国道の角にトラックを止めて、
ローザはちょっと申し訳なさそうに、

「お姉ちゃんによろしくな」

そう言って私を降ろしたのでした。どこがよろしくでしょうか……。
ローザは父母の家には何の連絡もしてなかつたのです。あとでローザは、

「気がついたらアンタをトラックに乗せとつた。もしお姉ちゃんに
なんか言つたらすぐ連れ戻されるやう」と、これです。

最初の夜、私の帰宅が遅いので学校に連絡を取つた父母は、私が
昼休みに女性に連れられて出ていたことを知り、それで事態のほ
とんどを悟りました。それでローザの職場に電話したものの、ロー
ザからの連絡待ちだと言われ、こちらからは連絡のつけようがあり
ません。そのあと、ローザは、職場には、自分から連絡するなどと
言つておいて、結局何もしなかつたのです。

父母がいちばん心配したのは無理心中でした。

母はローザの性格を知つてますから、いつか激発的に何かやりそ
うだとは思つてたみたいですね。

それで、ローザとのセンチメンタルジャーニーから帰ってきた玄
関で、安心と、怒りと、もつて行き場のない憤りで歪んだ母の顔を
見て、私も事態のほんどう悟りました。

そして、事態を悟つて凍り付いた私に、

「おかえり」とだけ母は言つたのでした。

大人の女性が泣くのをライブで見るのは、それが二度目でした。

*

運命の横断歩道を渡つた僕に、ローザはいきなり、「孝弘君、すまんけどリヤカー挽いてくれへんか。私、一日中挽いとつたら腰がやられてもうて。もうこんなもん放つて帰らうか思う

てたところやつたんや。そしたら、向こうに孝弘君が見えるやろ、もう神様か思つて呼んだんや」

「ええですよ」と僕は言つた。頼られるのはなんとなく嬉しかったから。

僕がリアカーを構えるとローザは後ろに回り、腕にしおつとした衝撃が伝わってきた。

「じゃあ、ええよ」と言われ、見れば、荷台には土まみれの野菜に混じつてローザ自身が手枕して丸くなつて寝こらんでいた。こんなことで驚いたくらい、つまり僕はまだローザをよく知らなかつたというわけだ。

*

ローザとのセンチメンタルジャーニーは、確かに親には心配をかけたし、複雑な家族関係を友達に知らせることにもなつたし、私にとってはよくない事件だったはずなのに、でもこの小旅行は、私に何か暖かい感情のようなものをもたらしてくれました。

私はそれまでずっと、宙に浮いたような、地に足の着かない感じを抱いて生きていました。もちろん、父母は優しかったし、姉も弟もよく駆けられていて、上品で、私もかなり馴染んではいたのですが、やはり心の核の部分ではこの家を拒絶していました。きっと、それがいくらコミュニケーションで形成された異様なものであつたとしても、そしてこの家の人たちの方が正しいと解つたとしても、自分の核までをも全否定することはできなかつたんだと思います。きっと、私は心に殻を作つてたんです。理性と感性という分け方で言えば、理性の部分では親や学校の先生に納得して従つてたんだけど、それは、もつと心の核にある感性の部分を守るためにたんじやないかと思うんです。感性の部分に殻を被せて、それを一生懸命守つていたんじゃないかな。

私はそれまで泣いたこともなければ、心から笑つたこともなかつたんじゃないかなと思います。今思つても、小学生の頃の私は異様でした。子供なりに、外の世界から自分を守る闘いに必死だったんで

しょう。その頃の写真を見ても、私には表情がありませんから。きょうだいたちと写っている写真を見たら歴然とわかりますが、もう少し笑つたり、驚いたりがあつたつていいような場面で、私だけは張り付けたような笑みが写し取られているだけで、そこには人間的な感情が入つてないんです。カメラそのものを拒絶するような冷たい笑みで、今見てもゾッとします。

それが、ローザとのセンチメンタルジャーニーで一変します。母の苦しみを思えば、とてもとても『楽しかった』などとは口が裂けても言えませんが、でも、その時の写真が、もう何よりも雄弁に語ります。私に表情があるんです。東京の居酒屋でローザのファンたちに囲まれたときの恐怖と不安で泣きそうな表情や、それから車中の起き抜けを撮られたときの怒りの表情、面白いのは青森の食堂でおばあちゃんの言つことが聞き取れなくて困惑した表情、そして何より、紅をさした唇がちょっと大人っぽく笑んでいる表情……。

私はローザとのセンチメンタルジャーニーで生まれ変わったんですね。大げさな言い方になりますが『生きてていいんだ』って、そういう感じですね。ちょっと違うかな。ローザのために『生きなければならぬ』って感じかもしない。いや、これも大げさですね。ちょっと生意気だけど『自分は頼られてる』って感じが近いかな。ローザは自分を頼っている、自分は頼られている、私たちは親子なんだって感じですかね。そういう自己肯定みたいな感じを得たんですね。それで、帰ってきた日の夕食時、聞かれもしないのに、旅行中のことベラベラと喋りまくったのを憶えています。

「洋子ちゃんどうしたの？」

なんて母は聞いたものです。

「どうしたつて？」

「そんなに喋つて」

「だつて、喋ることがあるんだもん」

そんな会話だつたと思いますが、とにかく父母を驚かせたことは確かですね。

もちろん、旅の昂揚は家で一泊するだけで冷めきってしまうました。そして逆にローザがしでかしたことの愚劣さを悟ったのです。

次の日、学校への足取りがものすごく重かったのもよく憶えています。

*

リアカーを挽いて『産直の店 ローザ』につくと、ローザは半ば強引に僕を食事に誘つた。

「いつぺんだけでええから、一口だけでええから、自然食を食べてみ」と言つのだつた。

僕は仕方なく、ローザのためと言つよりは、洋子のためにその夕食に付き合つことにした。家には友達の家で食べてくるとウソの電話をしたのだったけれど、それは例の玉葱に続く二度目のウソとなつた。

「自然食にはウソがあらへん」と、料理をしながらローザは言つた。
「最近の食べもんを見てみ、もうウソばっかしや。インスタントラーメンって言うたかて、あれラーメンちゃうやん。ニセもんのウソつきが、『インスタント』って頭につけるだけでまるで準ホンモン扱いや、そう思わん?」

「でも、あれはあれで美味しいからいいんじゃないですか?」「美味しい? あれが本当に美味しい思うんか?」「けつこう美味しいと思いますけど」

「ええか、それが問題なんよ。なんで、ラーメン屋の人人が何日も前から仕込んだスープで作った本物と、たかが三分茹でただけのモンが、同じラーメンって言われて比べられて、しかもインスタントなんかがけつこう美味しいやなんて言われるの? しかもインスタントの値段は本物の半分以下やろ? おかしい思わんか?」「工場で大量に作ってるからじゃないですか?」「そこやがな。なんでラーメンを工場で作れるんや」

「さあ」

「結局は大工場で作れるようなもんなんや。あんなのは工業製品で

あつて、食品やない」

「工業で作ったなら駄目なんですか?」

「規模つちゅうもんがあるやろ。食品つて言つたら、人が食べるモノなんやで。やつぱり、人が田の届く範囲の規模で作らんとじつかに無理が来る。見てみ、インスタントものなんか添加物だらけや。添加物をドンドン入れて、ニセモノを本物に近づけようとしてるんや。それでも添加物なんかが安全なら、まだよしとしょい……」「発ガン性ですか」

「孝弘君、よく知つとるな。基本的にはそういうことぢや。とにかく、安全性は一の次、三の次にして、こちどきに大量に作れるよう、作り置き出来るよう、持ち運びできるよう、そればっかりや。でもな、それは工業の論理であつて、農業の論理やない。どんなに科学が進んだかて、工場だけでは食品は作れへん。食品は絶対的に農業に依存しとるんや。工業が食品作りで出来ることは、本当は農業のお手伝い程度のものはずや。それがいつの間にか、農業そのものが工業の論理に毒されてもうて、田んぼは油田にするわ、食品は工場で作らすわ、無茶苦茶になつてもうとる」「だから自然食なんですか」

「それだけやない。もつと大事なことがある」「健康ですか?」

「うん。それも大事や。けど、もつと大事なことがある

「わかりません」

「自然食は、美味しい。それがいちばんや」

僕はローザの言つことにいちいち感心し、もつともだと思い、もつと話を聞きたいと思つた。つまり僕はローザのオルグ術にハマリかけていたというわけだ。

*

センチメンタルジャー——事件から一年ほどして、ローザは私の近くに帰ってきて、産直の有機野菜の店を開きました。直接には、今日ここには見えられてませんが、ローザの新左翼時代の先輩

が有機農法のネットワークを作っていて、そのネットワークの店舗の一つをやってみないかと誘われたことがきっかけだったと聞いています。もちろん、それは直接のきっかけであって、もっと深いところでは、私の祖父祖母がともに消化器系のガンで相次いで亡くなつたというのも動機としてはあつたと思います。当時のローザは、この世の中はどうかしてゐる、まずは食べ物をなんとかしなくては、みたいなことを、よく言ってましたから。

あの頃、うちの家によくローザが店開きの相談に来て、それで父母が反対していたのを憶えています。まず、うちの父母には、インスタンントが身体に悪いとか、残留農薬がどうとか、そういう発想は皆無でしたからね、またローザが「ミニコーンみたいなことをやり始めた、としか理解できなかつたんでしょう。

今でこそ「有機」つて付けるだけで売れる時代になりましたけど、当時はもう、無農薬とか、有機栽培とか、そんなことを言うだけで変人扱いでしたから。もちろん、有機栽培をやつてたローザの先輩や、そのネットワークの人たちが変人扱いだつたつてのもありますけど。

ちょっと横道にそれますが、私が思うに、運動というものを最初にやり始める人たちっていうのは、何か、どこか狂つた部分があつて、自分が思いこんだらもうどうしようもなくて、誰がなんと言おうが自説を曲げないし、反論されようが、反証されようが、絶対に我が道を行くっていうところがありますよね。皆さんも身に覚えがあることでしょうが、そういう人たちとは、やっぱり世間から見たら変人です。

でも、その変人が自説を貫いていく中で、もしその説が正しかつたら、変人でない人たちがついてきます。しかも、ついてくるのは、変人ほど狂つてはいけないけど、まあ少しは世の中のおかしさに気づいていて、それをなんとかしなくちゃと思っているような人たちです。そんな、いつみたら変人と常識人との中間にいるような、いわば半常識人たちが、今度は変人と常識人との間で翻訳を始めるわ

けで、つまり、狂信への理論付けですね。

だから、世間から見た運動なるものの印象が、一面で情熱的・狂信的であって、もう一面では理屈っぽいイデオロギー集団のように見えるのも、結局は、変人と半常識人との取り合わせから来るんじゃないかと思います。

で、ローザがどつちだつたかと言えば、もづ、もちろん、生糀の変人です。変人でなければ、あの時代に有機農産物の産直の八百屋を開こうなんて思うはずがありません。あの時代ですから、添加物や農薬の危険性を訴えたって、国が認めた物質がそれほど悪いモノであるはずがないってのが常識で、そこであえて、国が認めてるからこそ危ないんだって言いつるのは、これはもう、世間的に見れば絶対的な変人です。

*

「やからな」とあの日、料理を盛りつけながらローザは言った。
添加物や農薬が安全やという積極的な実験データはないんや。だって、人間の一生は八十年からあるんやから、そんなら八十年食べ続けて安全なんかどうか、データ出してみい、言つんや。そんなデータどこにもないやろ。マウスとか、モルモットとかで、何ヶ月単位、ひどいときは何週間単位でのデータだけで安全ってレッテルを貼るわけや。そんなんで、蓄積したときの身体への影響だと、十年単位の長期的な慢性毒性とか、何も言えるわけないやんか。そう思わんか?」「

「だったら、何を信用したらいいんですか?」

「簡単や。自分の舌を信用したらええ」

「でも、僕はインスタントラーメンも結構美味しいと思うんですけど」

「それは孝弘君がまだ本物の味を知らへんからや。本当の味を知つて、舌を肥えさせたら、そのうち本物しか食えへんようになる」

僕はこの時はまだ半信半疑だった。

「さ、食べて」と目の前に並べられたのは、五歩づき米の混ぜご飯

の焼きおにぎり、豆腐と薄揚げの味噌汁、菜の花の漬け物、蕪の漬け物、鰯の開き、とそんなものだったと思つ。なんか旅館の朝の食事みたいで、これで足りるんだろうかと思ったのを憶えている。そのころ家ではもっと洋風な、たとえばカレーとかハンバーグとか、そういう年頃の男の喜ぶようなアリガチなものばかり食べていたから。

ちょっと失望しながら、いただきます、と言つて、味噌汁に口を付けた。一口畠は味がないような気がした。

焼きおにぎりは外側は軽く焦げていて、中はふんわりとしていて、ジャコやビジキが香ばしかった。

漬け物は菜の花がほろ苦く、蕪は程良い酸味で、おにぎりと合わすと米が甘くなつた。

最初に本当に美味しいと思つたのは鰯の開きだつた。身の締まり具合と言い、味と言い、よくわからないなりに、これは違つと思つた。

「美味しいやろ?」

「はい」と僕は正直に言つた。「家で食べるのと全然違います」「何がちやうど悪いつ?」

「魚そのもの?」

「それもあるけど、塩がちやうどやで」

「塩?」

「食塙いうんはな、ほぼ五百パーセント塩化ナトリウムやろ。こじで使こてる塩はな、そんなニセモノちやうねん。海からとつた塩に近い成分なんや、これで干物にすると、魚の旨味を最大限引き出してくれんねん。しかも天日干しや。干物を機械で乾かすとな……」

僕はローザのウンチクや説明を聞き流しながら、味噌汁をすすり、漬け物を囁り、おにぎりをほおばつた。最初味が薄いと感じられた味噌汁は次第に滋味が感じられ、生まれて初めて味噌汁のおかわりをした。今度は豆腐にも出汁がしみていて美味かつた。漬け物もおかわりした。今度は大根と青菜だった。これも青菜のつかり具合が絶品な歯ごたえで、塩味と酸味が程良く、食べたことのない味がし

た。結局おにぎりもおかわりして、鰯の干物は三枚、頭も骨もかじつた。

「骨なんか残しやええのに」

「もつたいないですよ。美味しいですか？」

「歯がええんやな」

「そうでもない、ですけど」

「なんにしても、若い口は食べっぷりがええわ……洋子ももつと来てくれたらええのにな」

「ここにはあまり来ないんですか？」

「うん。来たくないんかも知れへんなあ」

この時のローザのちょっと寂しそうな表情は今でもよく憶えている。

*

どういう経緯でかはよく知りませんけれど、私が中学の一年生のころ、ローザは、うちから少し離れた場所に店舗兼住宅を借りて八百屋を開きました。ところが、店舗兼住宅とはまあよく言ったもので、平屋の掘つ建て小屋に毛の生えた程度の建物の、道に面した半分が土間で店舗、後ろ半分が六畳一間の居住部分という、なんともみすぼらしいシロモノでした。

「八百屋始めたから、遊びに来てな」

などと言われても、とてもとも、気楽に行けるような雰囲氣ではありません。なんか、裏に幽霊がいそうで。もちろん、ローザの名譽のために言つておけば、もともと店舗は商品見本のショーウィンドーぐらいにしか考えていなかつたみたいで、売り上げのほとんどはリアカーと軽トラでの宅配で稼いでいたと言います。

私の家ももちろんローザの野菜をとりはじめました。けれど、夏の野菜にそれこそ、もれなく虫が付いてくるんです。これを母は嫌がつて、その時期の青菜なんかは弟が洗い係でした。

それで、最初の夏、野菜についてきた虫を、弟が集めて飼つたことがありました。一匹づつ、野菜と一緒に一つのガラス瓶に入れて

飼うんです。

段々増えていく瓶に恐れをなして、母や姉は、「そんなものがにしかなれへん、捨てろ」って言うのに、弟は、

「ぜつたいチヨウになる」

なんて言い張るんです。考えてみれば、幼虫の図鑑つてなかなかありませんから、弟も、毛虫はガに、芋虫はチヨウになるもんだと決めてかかつてましたみたいで。私はといえば、虫そのものがどうなるかより、虫騒ぎの決着の行方が楽しみでした。意地悪な中立を決め込んだわけですね。

で、ある朝、弟が私と姉の部屋に入つてきました。そしてまだ布団の中にいる私の耳元に、姉には聞こえないような囁きで、「洋ちゃん、サナギがカエった」「なんになつた?」

弟は無言で泣き始めました。

「ガになつたんか?」

「うん」

「何色や?」

「ガ色」

ガが気持ち悪かったと言うよつ、きっと、母や姉の言うとおりになつたことが悔しかつたのでしょう。私は弟のそんな気持ちが何となくわかりましたから、こつそり起きていつて、二人でそのガを外に捨てました。

そんなことが何度も続いて、遂にチヨウが出ました。モンシロチヨウでした。弟は得意げにしていましたが、母は、弟が何度もガを捨てているのも知っていました。あとで母は私に言ったものです。「子供はガになつたとしても捨てられへん。チヨウになるかガになるかわかれへんモノつて意味では、子育ても虫を飼うんも一緒かもしれんなあ」

母がなぜそんなことを言ったのかより、なぜそんな何氣ない言葉

を自分が憶えているのか、そのことの方が最近は気になります。だつて、母のこの言葉を聞いて、私は絶対に「ガ」になつてはいけないんだ、この母のために「チョウ」にならなければならんのだ、などと、子供心に決意したからです。

つまり立派な人間にならなければならないんだといふことで、そして言うまでもなく、「ガ」の代表格はローザでした。

私はローザをいつそう避け始めたのでした。

*

「洋子、私を避けとるやろ」

あの夜、ローザは食後にビールを飲みながら言つた。夕食から続けてもう何本目かわからぬほど飲んでいた。

「そんなこと、ないんじやないですか」

「孝弘君は、親と話なんかする?」

「まあ、するほうだと想ひますけど」

「親つてウツトウしくない?」

「まあ、そう思つこともありますけど」

「大人やなあ。私があんたらのことは、もう親は全否定やつたからな。戦争責任世代や言つて。まあ、幼稚と言えば幼稚やつたわ」

「あの……」と僕は言い淀んだ。ローザをなんと呼べばいいかわからなかつたから。

「ローザでエエ」とローザは言つた。「戸籍に載つとる名前なんか忘れた」

「ローザさんのお父さんやお母さんは」

「死んだ。どつちもガンで。まあ、結構な歳やつたからな……ホント、親つちゅうのはやつかいなもんやと思つで。首に縄を付けられて、縄の範囲で反発してゐるうちまだエエ。大人になつてな、自立して、親の本当の姿が見えてきて、ああ、やつぱり自分は本当に親を憎んでエエんやつてわかるときが来るんや。自分の反発は正しかつたんやつてわかるときが来る。でも、もうその時になつたら、親はもう昔の親やないんや。反抗とか反発の対象やあれへん。すつか

り弱つてもうた、ただの年寄りや。それで、今度は首に縄はあれへんけど、人情ちゅう縄でがんじがらめや。憎しみながらもどこへも行けへん。で、死んでもうたら死んでもうたで、なんで自分はあんなに親を憎んだんやううて、どうしようもない後悔や。生きてた時には嫌なことばっかしやつたのに、死んでもうたら、今度は、楽しかったことやとか、優しかったこと、嬉しかったことばっかりが頭の中に浮かんで来よる。ホント、親つちゅうのは、やつかいやな「どうして洋子さんと一緒に暮らさないんですか」

僕は聞いてしまった後で、その質問の不躾さ、単刀直入さに自分で驚いた。けれどローザはそれまでと変わらない口調で、

「なんでやろなあ」と言った。「ボタンの掛け違いやな。なんかあの子とはズレるんやな。たつた一人しかおらん子供で、あの子にとつてもたつた一人の親のはずなんやけど、人生の要所要所でズレるんやな。私にも、もうわからへん。……あの子ももう、私があの子を妊娠した歳やしなあ。考えてみたら、私も子供やつたんやわ」「洋子さんの」と聞きかけて、あまりの露骨さに僕は言い淀んだ。

「父親か？」

「……」

「さあ、誰やろなあ。ははは、誰だつてエエわ。もつ関係ないしな。孝弘君はイヤか？ 父親が誰かわからん子なんか」「そんなことないです」

「やろ。やつたらエエわ。あの子もなかなか男を見る目があるわ。孝弘君は、とにかく、あの子だけを見てくれとつたらエエ。私は私、あの子はあの子で、別人格やから。生まれるときは一人、死ぬときは一人や。そのぐらいの覚悟はしとる」

*

例の、中学に入つてすぐに引き起こしたセンチメンタルジャーニー事件は、友人たちに、私にちょっと変わった「本当の母親」がいるのだということを知らしめてしまったわけですが、でも、このことは、逆に、私の強烈な個性の由来を皆に説明し、結果的に皆を安

心させることになりました。あの事件以来、むしろ友人が増えたくらいです。私自身も事件后、なんか吹っ切れた気持ちになつたのはさつきも言つた通りですけど、周囲もきっと変わってくれたんだと思います。私の本当の意味での社会復帰はこの時から始まつたのかもしれません。

でも、こちらが社会に復帰していけばいくほど、こんどはローザとの溝が深くなることは避けられませんでした。だって、どう考へたって、ローザは向こう側の人間でしたから。向こう側の人間つていうのは、つまり常識とか世間とかから離れた場所で、自分だけの世界、自分だけの正義の世界に閉じこもることを良しとするような人という意味です。だから、こちらが社会化されていく分だけ、ローザとの溝は深く、広くなつていつたのでした。

私はローザを避け始めました。そして私に避けられていることをローザも多分気づいていたのでしょう、あまり私にかまつてこなくなり、それ以後、私の中学、高校、大学時代を通じて、ローザを巡るトラブルは起きました……。

*

洋子は嘘をついていた。もちろん、あまりにも禍々しくてここでは口になどできなうだらうけれど。

*

……ローザと私とで、互いにとつて適正な距離が見つかつたのだと言つてもいいかもしません。こうして、私にとつてのローザは、表面的には、週に一回野菜を配達に来て、母と世間話をしていく人、その程度にまで、存在感を落としていました。

いえ、もしかしたら、普通でも、思春期というのはそういうふうに親子関係が希薄になるものなのかもしません。私は中学になって始めた卓球に夢中になつていましたし、勉強だつて忙しかつた。深い恋愛だつて知り初め、友人関係では悩んだりもしてました。そんな、思春期まったくの女の子にとって、いくら本当の母親だとはい、同居もしていないローザの存在感が薄くなつていくのは

当たり前と言えばあたりまえです。

しかも私は東京の大学へと進学したあと、そのままアメリカの大学院に留学して、それからは一度も帰省しない年もあつたりして、十年前まで、ローザとは疎遠と言つていいような関係になつていました……。

*
僕にいわせれば、あれは「疎遠」なんでものじゃなく、まさに「絶縁」だった。もちろん、そんなこと、ここで披露できるようなことではとてもないけれど。

忘れもしない、金曜の深夜、ローザから国際電話がありました。疎遠になつていたとはいへ、やはり本当の母親ですし、日本語の懐かしさに、最初は、その声の重さ、口調の真剣さを感じ取ることも出来ませんでした。

「私、もしかしたら、ガンかも知れへん」
それを聞いて、私はなんと言つていいかわからず、黙り込みました。

「ちょっと、一緒に医者に行つてくれへんか」

この時の「ちょっと」もまた、私とローザとではかなりなズレがありました。

「いつ行くの？」

「来週の火曜」

「私、今、アメリカなんやで」

「そうやな」と、ローザは寂しそうに言いました。「じゃあ、しょうがないから、姉ちゃんと行くわ」

「ちょっと待つて、どの位アヤシイの？」

「医者は、私にはホントのこと言つてくれへんねん。だから、わからへんねん」

十年前ですから、まだガンの本人告知なんか一般的ではありませんでした。だから、ローザの言つことも、さもありなんなどと思つ

たものです。

私はちょうど博士号を取得した頃で、できればアメリカに残つて研究を続けたい、と、アメリカの大学に残る道を探していました。遺伝子工学の分野ではやはりアメリカの方が先進国ですし、それに、私は日本之外に出ることでかなり解放された気分にもなつていましたから。

「来週の火曜は、私はなんぼなんでも無理やわ。お母ちゃんと連絡とつて、一緒に行つてもろうて、それで結果を私が聞くわ。ローザにはそれから教えるわ」

そして火曜を過ぎ、母から結果を知らせる電話があり、やはり乳ガンで、かなり進行しているらしいことを知ったのです。ローザ自身にも全部知らせているから、私からの連絡は不要だとも言われました。けれど、連絡せずにいられませんでした。

「どうしてやる」とローザは言いました。「私、ずっと食べ物とかには気をつけてきたのに、なんでやる。何が悪かつたんやろ」「何も悪くないよ」

「じゃあなんで、ガンになんかなるんや」「運よ、と言おうとして口をつぐんでしまいました。それでもその雰囲気はきっとローザにも伝わったのでしょうか。

「天罰が下つたんやろか」とローザは言いました。

*

天罰、という言葉に僕の心は震えた。ローザはあるの頃、よく、僕に、天罰が下るやろか、などと言つていたから。僕は身構えながら聞いた。酔いはすっかり醒めていた。

*

「天罰なんかあるわけないよ」と私はローザに言いました。
「ねえ、洋子、日本に帰つてきてくれへんか。手術の時、一緒にいて欲しいねん」

その時は一時間くらいの長電話になつたんじやなかつたかと思ひます。結局、私は学校の用事なんかがあつて帰国できず、手術の時

は一緒にいてあげることは出来ませんでした。そして、そのことを、私はその後、ローザからずっと責められることになるのです。

ケンカをすると、

「いちばん不安で、しんどかつた時、一緒にいてくれへんかった。
あんたなんか娘やない」

と、いつもこれでした。

それで、私の反論はといえば、

「でも、今こうやって一緒に暮らしてゐるでしょう。ローザがどうしても一緒に暮らしてくれって言つから、私はアメリカのキャリアを捨てて日本に帰つてきたのよ」

まあなんとも、犬も食わぬような親子ゲンカですが、こいついうケンカをくり返しながら、結局、九年半、私たちは一緒に暮らしました。もちろん、一緒に暮らしたと言つても、ローザも私も、それまでに自分一人の生活スタイルをしっかりと確立していましたから、ホントに、言つてみればシングル女性二人の共同生活に近いようなものだつたと思います。

だつて、そもそもローザの食生活に付き合つのは、私にはどうしても不可能でした。私の体質には玄米は多分合つていなくて、胃にもたれたり、下痢したり、不調が続くんです。ローザはきちんと噛めばそんなことはないと言つて、一口百回とか好きなことを言つていましたけど、朝の忙しい時間に玄米をゆつくり噛みしめてる暇なんかないし、お昼だって、硬い玄米おにぎりなんか食べてたら同僚とお話もできないでしょう。もちろん、ローザに言わせれば朝の化粧なんかナンセンスだし、同僚と昼休みまで一緒にいること自体がバカげてるつてことなんでしょうが。

結局、一緒に暮らし始めて一週間で、ローザとは一緒に食事をとする努力を放棄しました。

それに一緒に食事なんかしてたら、話題は私の仕事に触れてしまつて、お互に不愉快になっちゃいますからね。だつて、私は、ローザが不俱戴天の敵つて思つてゐる製薬会社の研究員ですから。

「農薬が農業を破壊してる。化学合成された薬が人間の病気も増やしてる。アンタはそれに荷担してる加害者や」なんて。

言いたいことはわかりますが、だからどうしたらいいの？ つて感じです。西洋医学は信用できなって言うけれど、アナタに診断を下して、手術を成功させたのは西洋医学でしょう、つて。

「それは認める。でも、そのあのフォローを西洋医学は何もしてくれへん。再発を防ぐんはもう個人の努力になつてもつとるでしょう」

だから何？ つて感じです。再発を防ぐとか、予防とかいう発想だつて、西洋医学でしょ、つて。

じうやつて、二人の適度な距離を見つけるまで、ホントにケンカばかりでした。口を開けばケンカで、結局ローザとは、互いの生活には全く干渉しない冷たい無関心に行き着きました。

*

僕がローザと最初に夕食をとった夜、もう九時をまわり、帰りかけた僕に、「ちょっと待つて」と、ローザはタンスの奥から何かを出してきた。

「もう洋子は、私があの子を妊娠した年やから、何があつても驚かんけど、でも、あんまり若くして母親になるつてのも、やっぱりしんどいんや。妊娠さんは、もうちょっと待ってくれへんか」

ローザが差し出したのは名前だけは知っていた避妊具だった。

僕はただ何と言つていいかわらず、受け取つていいものかもわからず、固まつていた。

「洋子にな、ボーラフレンドが出来たらまず私に紹介してくれつて言つたのは、こうこうことなんや。お姉ちゃん、洋子がお母ちゃん言つとる人な、お姉ちゃんには、洋子がもう妊娠できる年やなんて想像も出来へん思つねん。私にも憶えがあるし、洋子にも孝弘君にも、セックスするなとは言えへん。洋子も若いし、多分、そういうするやううとは思つねん。でも、その全部の結果を引き受けるにはやっぱり十代は若すぎんねん。だから、するときにはこれ使って、

な

ローザはそれを紙でくるみ、僕のカバンに勝手に入れた。

*

最初の手術から五年が過ぎても、ローザは再発しませんでした。見つかったときすでに進行ガンだったのに、五年経つて顕著な再発が見られないことで、ローザは自分の生活スタイルに対してさらに自信を深めたようでした。

「自然食がガンを抑えるんや。余命一年って言われたのに、再発もしてないで」

などと、野菜の配達先などで、自慢げによく言っていたものです。けれど六年目に転移が見つかりました。

「なんでや」とがっくりと落ち込んだ様は、はつきり言って哀れでした。ガンが見つかったときより、再発の時の方がショックが大きいと一般的に言いますが、ローザもやはりそうでした。

玄米も食べられなくなり、精米器を買ってきて、精白度の低いダイヤルで何度も精米して作った胚芽米を食べるようにならざるを得ませんでした。この作業はとてつもなく面倒くさいんです。これを朝夕ですよ。精米してすぐの米しか、「酸化しとる」なんて非科学的なこと言つてローザは食べないし、かといって自分では「しんどい」とか言つてやらないことも多いし、いつもして段々と、私の家事負担が増えました。私がマニキュアをやめたのはこの頃です。マニキュアのかけらが米に入るのをローザは極端に嫌がりましたから。

それで再発のショックから少し立ち直ると、ローザは、手術も抗癌剤もいらん、と積極的な治療を拒否しつつ、得体の知れない民間療法を渡り歩きました。医学的にはプラシーボ効果って言いますが、そんなものでも効くことがありますから、私はするにまかせていたんです。ところが、母や、ローザの古い知り合いなんかは、「なんでローザにあんなことやらじとくんや、洋子ちゃんはアメリカで博士号までとった薬の専門家やろ」

などと言つて私を責めるんです。でもですよ、効く薬があつて、

それを拒否してあえて民間療法に走っているというんなら、もちろん、そんなアホなことやめなさいっていいます。けど、基本的なことを言えば、ガンに絶対に効く薬つてないんです。効くつて言われてる薬でも、効果が出るのは数パーセントの患者さんに対してもだけですしね。だから、無理に抗ガン剤とか手術とかを勧めるより、好きにさせてあげればいいって、私は思つたんです。それがローザらしいとも思いましたしね。

もう本当に、内にはローザのワガママ、外からは外野の押しつけ、で、一時期は私自身がおかしくなりそうでした。

食事だって、ローザの望むような料理を整えることが出来るようになるまでにかなり時間がかかりました。知つての通り、ローザは、ちょっとでも気にくわないところがあると文句の嵐で、

「そんなら自分で作つてよ」ってなんど叫んだことか。そのたび、「自分で出来るならやつてるわ」って結構しつかりした返事が返つてくるんですけどね。

でもまあ、そういう、ワガママ放題、言いたい放題がよかつたんでしょう。それに野菜の宅配の仕事も続けてましたし、生きる張りつていりますか、そういうのがあつたんで、表向きはどこが病気なんだろうって感じでした。玄米を食べてた頃は痩せてたのに、胚芽米にしてからは太り始めましたしね。この遺影を見て、これがローザかどびっくりなさつた方も多いと思います。肌の艶もよくなつて、実際、このまま奇跡的にずっと生きつづけるんじゃないか、と、非科学的なことを思つたりもしました。もちろん、奇跡は起こりませんでした。というより、奇跡が起こる前に、ローザは逝つてしまつたのです。

ローザは確かに自然食を続けていましたけど、身体に害があるものをすべて避けているというわけではありませんでした。皆さん知つての通り、ローザは大酒飲みでした。飲み会ではまずはビール大ジョッキ五、六杯を軽く飲み、それから日本酒五、六合、締めはウイスキーをロックで三、四杯なんて飲み方です。毎日の晩酌も欠か

しませんでした。

「大酒が飲めるように、自然食で身体を作つとるんや」

などと豪語していましたが。

でもさすがにガンが見つかってからは量だけは控えていましたし、再発したときは一週間ほど断酒もしました。けれど有機農法の農家との集まりではどうしてもハメを外して飲み過ぎることが度々でした。

あの夜もそうだったのです。

トイレに立つたローザの帰りが遅いので、皆で探しに出たそうです。

ローザは畠の向こうの崖から河原へ落ちていきました。救急車を呼びましたが、即死に近い状態だったそうです。

一緒に暮らし始めたときから覚悟はしていたつもりでした。いえ、その日のために一緒に暮らし始めたようなものでした。でも、こんなかたちで最期が訪れるとは、本当に信じられませんでした。この時初めて、私には覚悟もなにも全く出来ていなかつたことを思い知らされたのでした。今日この会を発起していただいた、篠原さん、佐伯さん、村山さんのお三人がいなかつたら、私は何をどうしていいかさえ、わからなかつたことでしょう。本当にお三人には感謝いたします。

今日、ローザが逝つて三ヶ月が経ち、それでも私にはまだ信じられないのです。私の中ではまだローザは死んではないのです。私の中のローザはまだまだ生きていて、私の仕事に文句を付け、料理に文句を付け、化粧が濃いと言つては難癖を付け、しているのです。こんなふうに、皆さん的心の中にも、一人づつ、ローザがいるんだろうと思います。その一人一人のローザを偲んでいただく会にするはずでした。でも、これは私のワガママに過ぎませんが、私のローザについて、私の知っているローザについてだけは、皆さんと共に有したかつたんです。皆さんには、私のローザを知つていただきたかったんです。今日、私は生まれて初めてです。こんなに長くロー

ザのことを話したのは。

きっと、私にしか話せないローザがいて、皆さんにしか話せないローザがいて、けつして一人じゃないローザがいて、そういうローザの人生だったんじゃないかなと思います。

今日はどうもありがとうございました。

*

万雷の拍手を浴びながら洋子は席に戻った。司会も、還暦ダコも還暦ナマズも泣いていた。ただ、僕は泣けなかつた。洋子が話の中で意図的に避けていた部分の重さが、僕にただ悲しむことを許さなかつた。

*

あの春の夜、ローザからもらつた一ダースの避妊具を、僕は洋子と使つことはなかつた。すべて、ローザと二人で使つたのだつた。

(つづく)

第一章 ローザと洋子

高二の春、ローザから渡された例の避妊具に僕はある種責任の重さを感じ、逆に洋子とのつき合いには気持ちの上で慎重になつた。こうじつものを使つてはいけない、自分たちはそんな関係になつてはいけないとさえ思つた。けれど、最初の頃は硬かつた洋子の身体が日を経るごとに次第に柔らかく変化していくのを腕の中で感じ取るようになると、僕もやはり年頃の男だった。そして年頃の男らしく女の扱いについては無知で、どうやって次の段階へ進んだらいいのかもわからず、ただ、図書館の裏で、美術準備室のロッカーの蔭で、淡い抱擁を重ねつつ、自分の情熱をもてあましていた。それでもう初夏と言つていい季節がやつてきて、互いの服も薄くなつていた。抱擁も、肌の堅さや柔らかさを感じあう官能的なものになり、もはや「淡い」とは言えなかつた。

「なんか最近、ヘンや」と洋子は言つた。

「何が?」

「孝弘君」

「別にヘンじゃないと思つけど。いつも通りやで」

「違う。何かヘンや」

そういうやりとりを抱擁の後で何度も繰り返した。

*

ローザに借りた本が僕の進路を決めた。実際、その本に書かれていた農薬や食品添加物やなんやかんやの危険性に震え上がり、これはなんとかしなければ、と思い、本を返しに行つた『ローザ』の店先で、僕は、自分に今何が出来るのか、何をしなければならないのか、ローザに聞いたほどだつた。

「自分に何が出来るんか、それを探しに大学に行くんじゃないの」とローザは言い、「でも、これから絶対に環境問題が社会的テーマになる。ならんはずない。だから、環境問題のことをきちんと勉強で

きる学科に入るのもいいかもしね。理系やつたらツブシもさくや
るし、理学部とか農学部なんかどうや」などと続けた。

そしてこんなアジに十七の僕は感じ入り、文系というつまらぬ選択をしたことを実に実に心から悔やみ、先生方に、理系へとコースを変えてくれと直談判した。ある先生はまず開口一番、洋子と同じクラスになりたいからとちやうやうな、と冷やかしてきた。でもこれは馬耳東風、環境問題を勉強したいんです、そのためには理系でないと駄目なんです、浪人も覚悟しています、などと、今思えば恥ずかしいくらい、熱く熱く、環境問題への情熱を喋りまくった。先生方は当初は全面拒否、けれど、面倒臭さからか次第に折れてきて、次の業者模試で理系の試験を受けてみる、数学で平均近くの点を取れたなら考え方という地点にまで折ってきた。それで僕は理系コースだった洋子にすがりついて数学をやり直し、結局、試験では平均すれすれを取り、二学期からは理系コースへと移ることになった。

*

ローザのアジテーションにハマつて次第にエコロジー関係にのめり込んでいく僕を、洋子は静観し、冷やかし、もう少し距離を置いたら、などとたしなめた。

「ローザの若い頃のこと、教えたるか？」と洋子は言った。

「左翼やつた頃のことか？」

「そうや。ローザってあだ名もな、ローザ・ルクセンブルクから来とんやつて」

「ふーん」

「凄い思わん？ ローザ・ルクセンブルクやで」

「誰？ それ

「孝弘くーん！」

洋子は僕の名を呼びながら、両手の平をソバ屋の出前持ちがるように肩の高さにまで持ち上げ、呆れた、という身振りをしてみせた。これは小学校以来のお芝居の仕種で、高校になつても洋子はこどある」とにこういうことをして男子たちからは蔭で宝塚の「ヅカ」

と呼ばれていた。

洋子は続けた。

「ローザ・ルクセンブルクも知らんと、これまでローザって呼んどつたなんか？」

「よくないか？」

「ものすごい有名な女革命家なんやで」

「ソ連の？」

「孝弘くーん！」

「それはもうええ。で、それがどうしたん？」

「とにかく、ドイツの共産黨の創始者で、オルグの達人やつたらしいんや」

「オルグ？」

「孝弘くーん！」

「それはもうええって言つとるやん、しつこいで」

「やから、私が言いたいんはな、ローザの話は話半分に聞かんとかんつてことや」

「もし、俺がローザの話だけで進路を環境関係にしたつて思とるんやつたら、それは誤解やで。だつて、ローザは確かに色々教えてくれるけど、基本的な知識は本からやで」

「その本はローザから借りてるんぢゅうの？」

「いや、もう最近は図書館から借りてきとる

「ローザのお薦めを？」

「違うのもあるよ」

「でも、基本はローザやわ」

「ま、そやけどな、でも色々読んでも、ローザの話は間違つてはないと思つ」

「どんなどころが？」

「食品添加物の問題とか、農業問題とか」

「それは認めるよ。でも、それと進路とは別問題やと思つ。ローザの言つことに感心するだけならともかく、それで進路を決めてしま

うつて言うのは、やつぱり、オルグにはまつてると思ひ

「いつたい、そのオルグって何なん？」

「勧誘、みたいな感じかな」

「別に、勧誘自体は悪いことぢやうやん」

「それもそうやけど、あんまりはまりこむのはどうかと思ひで」

と、まあ、こんな感じのやりとりを繰り返し、時にはそのまま触れた指先で求めあつて抱き合ひ、またある時にはそのままケンカ別れして畠田にはケロリと仲直りしたりした。

*

当時は共通一次試験というシロモノがあつて、国立大学はその合否得点ラインでだいたいのランキングがあつた。だから三年生になつて業者模試を受けるたびに志望校のランクを少しづつ上げていく同級生や、逆に下していく同級生、さらには同じ大学の学部の志望を工学部から理学部、理学部から農学部へとクルクル変える奴までいて、いつたいお前ら、大学で何がしたいんや、などと、ローザに会うまでの自分をさておいて、僕は洋子と二人、憤つていた。といつのも、洋子は早々と東京の大学に決めていたし、僕もローザの薦めで環境問題の権威のいる愛媛の大学への進学を希望していたから。自分はお前らとは違う、自分は社会のこと、学問のこと、そんな色々なことを考えて進路を決めているんだ、などといつ、ある種傲岸なエリート意識のようなものを僕はこのころ持つっていた。

「あいつら、何にも考えてへん」と当時の僕は傲岸にも言つたと思う。

「アホな連中はどつじよつもない」と当時の洋子も傲岸に答えたと思う。

*

夏休み最後の日曜、洋子と一人で『ローザ』へ行つた。ローザが、夏休み中に一度三人でお好み焼きでも、と言つていたのに、洋子はなんだかんだと理由を付けて延ばしのばしにして、結局最後の日曜になつてしまつたのだった。当日も、待ち合わせの本屋の店頭から

して洋子は不機嫌で、そこから『ローザ』までの数分間、僕らは全く口をきかなかつた。

『ローザ』について上にあがつてからも洋子は黙つて座りこんだり、お好み焼きの用意を何一つ手伝わなかつた。僕の方が氣を使つて、山芋をすり下ろしたり、紅生姜を刻んだり、焼き海苔をハサミで細く切つたりした。

洋子の顔は、何かに憤り、今にもその憤りを何かにぶつけたがつてゐるようだつた。そしてその憤りが、僕や、ローザにかかるらしいこともなんとなくわかり、ローザは洋子には話しかけなかつた。テーブルコンロが置かれ、フライパンが焼かれた。

油が引かれて生地が流し込まれると、チッという音がして、洋子は「熱ッ」と手を押さえた。

「大丈夫か」とローザは言つた。

洋子は手を押されたまま頭を振り、何も言わなかつた。

「大丈夫？ 水で流して冷やした方が……」

「いいの」と洋子は言い、また黙り込んだ。黙り込みながら、肩だけが小刻みに震えていた。肩までの髪がTシャツの首筋に流れ、何か凄艶な感じがした。

「大丈夫？」と僕は言つた。

「大丈夫じゃ、あれへん」と洋子は絞り出すように言つた。

「だつたら……」

「放つとき」とローザは言つた。

「その言い方、なに？」と洋子は顔を上げた。ただごとではない表情だつた。僕は何が起こつてゐるのか理解不能で、ただこの母娘を交互に眺めるしかなかつた。

「なんで私が怒つてるのか、わかる？ ローザにわかる？」

「わかれへんよ、言つてくれんとわかれへん」

「私は、私は……」

「何？」

「私はローザとは違う！ 結婚するまでセックスはせえへん！」

洋子の低い叫びを聞いて、僕は驚愕し、そして同時に、これだつたのか、と妙に納得した。夏休みに入つて最初の頃、例のモノをもつたことを洋子に言い、ローザには困つたモンだ、みたいな口調でそれとなく感触を探つたことがあつた。洋子はその場では一緒になつて笑い、けれど次に会つたとき、抱擁をそれとなく拒否した。三日くらい経つてその次に会つたときには抱擁はしたけれど身体は硬かつた。洋子が極端に緊張しているのがわかり、こちらも緊張し、硬くなつた。僕らの何かが壊れ、どこか、もはや後戻りの出来ない場所へ来たのがわかつた。

そして硬い抱擁を続けた夏休み最後の日曜に、これだつた。

「結婚するまで、せえへん」と洋子は繰り返した。

「いや、する。絶対に、する」とローザは平然と言つた。

「どうしてわかるん?」と洋子はちょっと甘えた口調で言つた。僕や友人たちには絶対に聞かせないような声だつた。

「あんたは孝弘君が好きなんやろ。孝弘君もあんたが好きやし、思ひどじまる理由は何にもあれへん。機会ときつかけさえありや、起ころうことは起ころる。セックスなんて、そんな程度のもんや。過ぎてみれば大したことない。セックス自体は大したことないけど、でも、子供は別問題や。もし妊娠なんかしたら、その結果を引き受けれるんはあんたや。あんたはまだそんな結果を引き受けたはないやろ。だから、孝弘君にお願いしたんや。そういうことや。そうやろ、孝弘君」

僕は何も言えず、ただうなづいた。

「洋子を傷つけたんなら、謝る。何か起こるなりこの夏やつて、私は勝手に思つたから……」

「私を妊娠したとき、びっくりせんかつたん?」と洋子はまた甘えるよつた口調で言つた。

「つうん。もともと産みたかつたからな」

ローザはまた平然と言い、お好み焼きの上に具を並べ始めた。今度は洋子も手近にあつたエビを手でつまんで乗せた。

「行くで、気をつけて」

ローザはお好み焼きをひっくり返し、口テで軽く押された。

「で、なんやつたつけ？ あんたを産んだ理由？」

「うん」

「なんでやろなあ。あの頃の私の発想としてはな、セッククスするのも当然、妊娠するのも当然、産むのも当然、結婚せえへんのも、出生届を出さへんのも当然やつたんや。今でも、その考えはそう間違つてへん思うド」

「私はそれが正しことは思えへん。私はきちんとしたい。結婚も、子供も、きちんとしたい」

洋子はそう言つてお好み焼きを口テでグイッと押された。脇からしみ出た生地を口テでまとめながらまた押された。ローザはその様子を気にしながら、

「きちんと、ねえ」

「そりや。私みたいなメには、子供は絶対あわせへん
「どう思つ？ 孝弘君。あんたもきちんとしたいん？」

「そりですね」と僕は言葉を濁した。

「あと五、六年、セックスせんと待つんか？」

「やめてよ」と洋子は今度は落ち着いた口調で言つた。そしてお好み焼きをまたグイッと押された。

「あんた、それ、押さえ過ぎやで」

「押さえんとなかなか焼けへんやんか」

「お好みは育てるもんや。厚いのをゆっくり待ちながら焼くんがええんや」

「じゃあ、次のはローザの好きにして。これは私の好きにする」

洋子はもう一度お好みを押さえ、その口テでひっくり返した。ローザはソースをかけ、鰹節の粉と、さつき僕が切った海苔と紅生姜をふつた。

ローザは立ち上がり、冷蔵庫に向き合しながら、

「あんたたち、ビール飲む？」

「いえ」という僕の声と、「うん」という洋子の声が被さった。

「飲めるん?」

「少しだけね」

「私に似たんやろな。きっと飲みスケになるわ。じゃ、孝弘君は麦茶、私は泡の出る麦茶やな」

僕らは乾杯し、さつきの湿つた空気を払うかのように、学校のことや、進路のことや、世の中のことを話しあつた。ローザと洋子は今度は友達同士のように笑いあつていて、こんな母娘関係もあるんだと新鮮に思ったのを憶えている。

そして『ローザ』からの帰り、公園の植え込みの蔭という実にアリガチな場所で、僕らは初めてのキスをした。互いの鼻が邪魔だつた。

*
夏休みが終わり、僕は理系コースへ編入された。洋子とは別のクラスだつたけれど理系同士の共通の話題が増えたのは嬉しかつた。ただ、受験勉強はもはや佳境に入り、洋子とそつそつ外で会うことは出来なくなつていた。

*
業者の模擬試験と定期試験とに追われながら、僕らは実際に短期間に誰に教わることなく鼻をよけることをおぼえ、唇を湿すようになり、少しだけ舌を合わせたりした。そしてその間に秋ははや過ぎ、セーターを着込めば互いの肌を感じることは出来なくなり、僕らは唇と舌だけの官能を、初冬の風に吹かれながら名残を惜しむように味わっていた。事実、順当に行けば春から一人は東京と愛媛の松山とに別れて過ごすことになつていて、その期限付きの逢い引きの純粋な気持ちは今思つても胸が切なくなる。

そして僕らは一人とも志望大学の志望学部、志望学科に合格した。

*

松山への引越はローザと同道することになった。

松山の隣街にローザが師と仰ぐ自然栽培の権威がいて、ローザは

もう何年も、その師のもとへずっと月に一度ほど通っていた。それでローザは、松山の街を案内するからと、僕の引越の日に自分の松山行きを合わせたのだった。

船に乗り込み、二等席の大部屋に荷物を置くと、洋子の本当の母親と枕を並べて神戸を去るという不思議さになぜか胸が熱くなり、頭さえ熱くなり、すぐに甲板に出た。

出航時間が来て録音の銅鑼の音が鳴った。帆が解かれ、船はゆっくりと岸を離れていった。

僕は甲板の手すりから神戸の夜景が遠くなつていいくのを眺めつつ、洋子を思った。もうあの街には洋子はないのに。洋子はその三日前に東京へと発っていた。

大部屋に戻ると、ローザは缶ビールとカップ酒を買ってつまみも広げていた。

「孝弘君、ちょっと飲んでみん？」

「僕、お酒、飲んだことないんですけど」

「どうせ向こうに着いたら新歓コンパやらなにやらで飲まれるで。ここなら酔っぱらつても寝りやいいだけだから、心配ないし、ここで自分がどの位飲めるんか、試しておいたら？」

ローザは紙コップに注いだビールを差し出した。両親は家では酒を飲まなかつたから、僕自身、ビールを舐める程度に味わつたことはあっても、本格的に飲もうと思つて飲むのはこれが初めてだつた。ビールは思ったより苦くなく、むしろ甘くないのがなんとなく感動だつた。

「どう？ 飲めそう？」

「はい」

「日本酒も飲んでみる？」

ローザは飲みかけのカップ酒を差し出した。これは口にした途端、アルコールだという感じがした。

「お酒って、美味しいんですか？」

「この酒は不味いよ。だって、見てよ

指されたカップの蓋には『原材料 米 米麹 釀造用糖類 釀

造用アルコール』と書かれてあった。

「お酒っていうのは、米と米麹だけで作るものやろ、本来。やのこ、糖類をぶち込んで、アルコールで度数を増して、更には、やで、こには書いてへんような添加物まで使って味を作つとこや。美味しいわけがあれへん」

「じゃあなんで……」

「酒にはね、美味いなーって言いながら飲む酒、仕方なく飲む酒の二種類があつて、これは船の中でゆっくり寝つくために仕方なく飲む酒や。まあ、向こうに着いたら色々教えてあげるわ」

話し込んでいる間もなく、消灯だった。

*

早朝の松山観光港の堤防から見下ろした海はまるで別世界のようになに澄んでいて、僕はなんとなく嬉しくなつて深呼吸した。受験の時や下宿探しの時には余裕がなくて感じ取れなかつた些細なことどもが僕の五感に迫り、ひやりとした潮の香りが僕の胸を満たした。ここで自分は四年間を過ごす、と、不安と希望とが混ざり合つた不思議な感情が、早朝の、湿つた、それでも澄んだ空気と一緒に僕の胸を満たした。

観光港から私鉄の駅までローザについて少々浮かれて歩きながら、それでも心の奥には、この気持ちを洋子と共有できない寂しさを抱いていた。

*

洋子とは夏までで終わつた。

帰省した神戸で、洋子から、もうお互いに縛りあつのはやめよう、と切り出され、僕も納得した。どちらも別に新しい関係が出来たというわけではなかつたけれど、ただ、新しい関係へ向けての自由さが欲しかつたのだと思う。

「何か私に言つことない?」と洋子は言つた。

「これで最後のお別れつて訳じやないし、別に

「じゃあ、さよなら」

元町の喫茶店で払いを僕に任せて出していく洋子に何の未練もなかった。むしろ舞い込んできた自由に身軽さえ感じていた。

結局は、高校という狭い人間関係の中での選択だった。互いに本気で好き合っていたのかどうかもわからない。そもそも洋子とは、付き合いましょう、そうしましょう、で始まつた関係ではなかつたし、であれば別れも何もない。ただ自然消滅していけばいい。と、その時はそんなことを思つていた。

*

ローザとは秋の学園祭で再会した。

大学で僕は環境問題を勉強するサークルに入つていて、それで学園祭でのイベントでローザの自然栽培の師匠を講演の講師としてよんだのだった。その会場に師匠と一緒にローザが現れ、当日、受付をしていた僕に、

「別れたんやで？」と素っ気なく言つた。

「まあ、なんとなく」

「今晚、ちょっと飲めへんか」

「いいですよ」と僕は躊躇なく言つた。大学に入學して以来、様々なコンパをぐぐるうちに自分が飲めるクチであることに気づき、むしろ酒好きになり、誘われる飲み会には金の許す限りすべて顔を出すようになつていた。それに、ローザとは春に松山を案内してもらって以来で懐かしかつた。

もちろん、今考えてみれば、別れたガールフレンドの母親と飲みに行くというのも変な話ではあるけれど、当時の僕にとつては洋子とローザとはなんとなく別個の存在としてあって、その別個の存在が偶然に母と娘であつたと、そんな感じだつた。だから洋子のことで何か責められるとか、そういうことも想像できなかつたし、事実、ローザにもそんなつもりは毛頭なかつたう。

*

「じゃ、乾杯」と僕らは学生街の焼鳥屋でジョッキを合わせた。口

一ザは中ジョッキの半分ほどを一気に飲み、ダン、と音を立てて手一ブルに戻した。

「ああ、美味しいな、街に出たらやつぱりビールやなあ」

「山小屋では飲めないんですか?」

「だつて、冷蔵庫があれへんもん。日本酒ばっかしや」

「純米酒?」

「もちろん。孝弘君も自分で飲むんは純米酒にしちゃや」

「なかなか売つてないでしょ?」

「デパートに行きやあるで」

「でも一人じゃ飲みませんからね」

「うん、その方がええな。寝酒とかやりだしたら、癖になつてやめられんなるからなあ」

「でも、コンパじゃあ、もう無茶苦茶な酒ばっかしですよ。甘いし、一日酔いするし」

「本来なら若い人間の方がいい酒を飲むべきなんやろうけどな。で、大学は面白い?」

「面白いですよ。色んな人がいて」

「やろなあ。それで、学生運動なんかはないの?」

「セクトはあるらしいんですけど、何をやつてるんでしょ?」

「まあ何かしとるんやろな。関わらんほうがええやろけど」

「ローザさんは若い頃、学生運動やつたんでしょ?」

「学生運動ちやうで。私は高校中退やから。でも、大学の周りをうろちょろして、ホント、かなりの数の人間の人生を無茶にしたであれはいかんかった。本当に」

「内ゲバとか、そういうのですか」

「私のときにはまだそこまで行つてなかつた。ただ、内ゲバを始めたんは私らがオルグした連中やから、責任のいつたんはあるやろな。それに、今になつて思えば、私たちの感情的なもつれが下の世代になつて表面化したつて面もあると思うよ」

ローザはジョッキを飲み干しておかわりを注文した。焼き鳥も最

初に注文した分が来た。その串をくわえ、身を歯で抜き取りながら、ローザは僕に視線をくれた。思わずぶりな、ちょっといたずらっぽい目で、洋子がよくしていたような表情だった。僕はちょっと照れて視線を外した。

「洋子とは駄目やつたんやね」

来た、と思つたけれど、別に焦りはしなかつた。そのことで僕を責めるつもりなどローザには全くないだろとわかつてたから。

「もう縛り合わないようにしようつて」

「それつて、別れたつてことやないの」

「そういうことだと思いますけど」

「そうか。でも、うまくいけばよかつたのになあ」とローザは言い、ジョッキ半分ほどのビールを一気で飲み、今度は、カタリ、と小さな音を立ててテーブルに戻した。

「考えたらアホな話やけど、ずっと、孝弘君が洋子の子供の父親になるような気がしててな、だから、孝弘君を環境問題とかそっちの方向に引き込んだんや。洋子はずっとウチの野菜とか食べてるから遺伝子とかそう傷ついてないと思つんやけど、イブだけやあかんからな。アダムの方も気をつけといてもらわんと困るからつて、そういう下心があつたんよ。でもなあ、十八の頃の自分を思ても、その頃の男とそつそつ続くモンやあれへんしな」

僕は何も言えず、黙つてビールを飲んだ。ローザはビールのおかわりを注文した。

「後悔してへんか?」

「何をです?」

「環境の方面に進学したこと」

「全然、全くですよ。もしローザさんに色々聞かなかつたら、結局はどうとかのどうでもいいような文系の学科に入つてたと思います。そうなつてたと思うたら、逆にゾッとします。それに、友達だつてできましたしね。結構、ウチの学科つて面白いんですよ。色んな所から色んな奴があつまつてて」

「そりやうな。環境問題つてまだまだやつてる学科少ないからな」
僕はそれから学科の先生の顔ぶれや、研究室に出入りしてイルカの解剖なんかを手伝つたりしたときのことや、友人になつた男の変人ぶりや、そんなことをずっと喋つた。

「孝弘君はええなあ」とローザはポツリと言つた。

「え?」

「洋子ももつと大学のこと話してくれたらええんやけどなあ

「あんまり、話さないんですか?」

「あんまりなんてもんやない。まつたく話さへんで」

「夏休みには会つたんですね」

「大学のことなんか、全く話さんかつたで。孝弘君とは別れたつて言つたけど」

ふうん、と僕は一抹の寂しさを感じて言つた。

「だつて、あの子は遺伝子工学なんてやううとしてるんやろ。私がらすりや、遺伝子に手をつけるなんて、悪魔の所行やわ。洋子も、私にそう言われることがわかつとるから、もつ最初から大学のことなんか口にせんよつにしとるんやろな

「そうかも知れませんね」

大学のことや洋子のことや、なんだかんだと話しながら夜は更け、結局ローザは僕の四畳半の寝袋に泊まつていった。もちろん何も起ころばずはない。そのときの僕には四十の女性がまだ「女」でいるなんて想像さえ出来なかつたし、ましてやそのときの僕が四十の女性を相手に「男」になるなど、絶対にあり得ないことだったから。

*

ところが、男と女の間にあり得ないことなどないことをその冬には思い知ることになるわけで、つまり十一月に飲みに行つた後で僕はローザ相手に初めて「男」になり、しかもそのすぐ後の冬休みには洋子ともヨリを戻してしまつたのだった。

*

「カノジョとか、出来た?」と洋子は高校近くの喫茶店で言つた。

「どうやろな」と僕はアイマイに答えた。まさかローザはカノジョでもないだろ？し、それでも、これまで三回も夜を共にした上に次の約束の日まで決まっている相手がいては、完全に一人というわけでもあるまい。

「昨日、ローザに会つたわ」

「そう」と僕は平静を装つた。

「会つてるんでしょ、松山で」

いたずらっぽい目が僕の表情を探つていた。

これは何も感づいていない目だとわかり、僕は、

「うん」と短く答えて洋子の反応を待つた。

「ローザがカノジョ？」

「だつたらどうする？」

「面白い。おもしろすぎる。大笑いする」

「洋子は、どうなん、カレシは？」

「出来たよ」

僕はちょっとショックを受け、どう反応していいかわからなかつた。

「でも、別れた」

「なんで？」

「だつて、すぐ、ヤラセ口やらせられて、なんかガツガツしてるんだもん」

「結婚するまではつて言つてたもんな、前に」

「と言つよつ、ガツガツしてるのを見たくないのよ。なんかオス丸出しで、情けなくつて。けつきよく私はあの人にとっては一匹のメスに過ぎないわけで、そういうオスの目でしか私を見ていないんだつてわかつたら、なんだかイヤになっちゃうでしょ」

「オスとかメスとか、すごい表現やけど」

「でも、本当なのよ。もう、イヤになる」

洋子は東京言葉になりかけていた。それが逆に新鮮だった。

「俺もガツガツしてたかなあ」

「孝弘君は違うわ。孝弘君が私を大事にしてくれてたのはわかったし、そのことは別れてからもっとよくわかった」

「ガツガツするだけの勇気がなかつたんかも知れへんで」

「同じよ。心の中でガツガツしても、表面に出すかどうかはまた別の問題だから」

「洋子も色々あつたんやな」

「うん。たつた三ヶ月やつたけど、縛りあわない関係になつててよかつたわ。視野が広がつた」

そういう、決して核心に触ることのない会話を一時間ばかり続け、僕らは喫茶店を出た。そしてどちらが言うともなく、黙つたまま、初めてキスをした公園へ向かい、同じ場所で抱き合つて唇を重ねた。

多分、洋子は、そのガツガツした男とキスはしたのだろう。そういうことを互いに探り合うようなキスだつた。そしてふとローザの唇と比べている自分に気づき、一瞬ゾッとして思わず身体を離した。「どうしたん?」「ううん、ちょっと寒かったから

「外はやつぱり寒いね」

そう言つて洋子は自分のマフラーを僕にもかけてくれた。僕はマフラーで繋がれた洋子をまた強く抱きしめ、パーマされた長い髪を搔き上げながら頬から耳への産毛に唇で触れた。柔らかい髪からはコロンの香りが淡くたちあがつてきて、これが普通の若い女なんだ、柔らかく、攻撃的でなく、いい匂いがして、これこそが僕に釣り合う女なんだ、と思つた。そして洋子への愛おしさが戻ってきた。僕はローザとの関係はもうやめようと決意しつつ、洋子の頬を抱き上げ、また唇を重ねた。

*

松山に戻り、ローザとの、洋子とヨリが戻つていらい最初のデートの日になつた。僕は心の芯に何か堅さを含んだまま待ち合わせの店に行つた。

ローザは炉端焼きのカウンターにチョコンと小さく、物思わしげに少々うつむいて座り、僕に気づくと顔を上げた。その物腰が堂々としている分だけ、小柄さと少年のようなショートの髪がどこか滑稽だった。ここでも僕はローザと洋子とを比べていた。

「よ！」とローザは軽く右手を挙げて僕を迎えた。

「待ちました？」「僕はローザの隣に座った。

「さつき来たところ。じゃ、注文しようか。まずはビールね」

ここでもう、僕はいつものようにローザのペースに乗せられてしまい、結局飲み屋では何も切れ出せなかつた。

下宿に一人で戻り、布団を整えながら、もう駄目だな、と思った。そしてじつさい、駄目だつた。

この時僕はローザとの交わりを初めて味わつたのだつた。

一回目は飲み過ぎていたからか不発だつたし、二回目は早すぎたし、三回目になつて初めて交わりの構造と機能を理解できただけで、まだまだそれを楽しむとか味わうとかいうゆとりは持ち得ていなかつた。

そして今回、快樂を共有することの樂しさを知り、まさにそれを堪能し、まだまだ荒っぽいけれど間違いなく本物のセックスの官能を味わつたのだつた。

「楽しかつた？」とローザは初めて聞いてきた。

「うん」と僕は少しテレながら答え、達成感に満たされてローザの身体を抱きしめた。少年のような風貌なのに、出るところは出て、引っ込むところは引っ込み、ちゃんと女の抱き心地がするのが不思議だつた。そしてまた僕はここでも、大柄でむしろフクヨ力と言つていい洋子と比べ、それでも、もう、ゾッとしたりはしなかつた。

*

それから何度も関係を重ねるうちに四畳半の下宿では壁が薄すぎて気になるようになり、ローザに連れられて初めてラブホテルといふものに入った。部屋の真ん中にドンとある丸い広いベッドが何か滑稽だつたけれど、それでも風呂はあつたし、テレビもタダだつた

し、下宿よりはるかに快適だった。

「何年ぶりやろなあ」とローザはベッドの中で言った。

「ラブホテルが?」

「うん」

「前はよく使こたん?」

「色んな相手があつたからね。妻のある男とか、ね。そういう男とはこういう所でしかできへんし、な」

それを聞いてふと思つた。

ローザはこれまで何人の男とやつたんだろう。いや、過去のことはどうでもいい。それより将来、自分もその何人かの男のうちの人として指折り数えられるだけの存在になるのだ。ローザにとつて僕はそういう存在なのだ。

何か寂しさがこみ上げてきた。

「畜生とくせう」とローザは言つた。「私を好きになつたらあかんで

心を見透かされたようで恐ろしくなり、僕は何も言えなかつた。

「こいついう関係は割り切つとかんとアトがしんどいからな。私は結婚なんて関係にハマつていくことなんて考えてへんし、逆に言つたら、孝弘君を縛ろうとかいう氣もさらさらあれへん。だから、お互に好きの嫌いのなんて言つのはやめよな。もちろん、今は孝弘君が好きやけど、でも、人間の心なんてわかれへんもんやからな。孝弘君にも私とこんなことするん、やめる日が絶対に来るし、私の心だつて、わかれへんもん。な、どっちかの気持ちが変わったときは、その時はスパッと行こうな。好きの嫌いのでスガリついたりは絶対にやめよ。約束や、私らは、どちらかが止めよう言つたら、終わりや。それだけはわかつてヤロな」

気持ちも身体も萎えそだつたけれど、やってみればそんなことはなかつた。それに、こんな格好いいことを言つていながら、スガリついてきたのはひと月後のローザだった。

*

春休みの帰省最後の日、洋子と僕は喫茶店を経て例の公園へと歩いた。

夜のフェリーで僕は松山へと帰ることになつていて、早春の薄暮の中での最後の口づけは帰省中に数度重ねたどの口づけよりも濃厚だつた。

その最中、突然、洋子は僕を突き飛ばした。

「どうした？」

洋子の怯えきつた視線の先を追うと、反対側の植え込みの中に入りの気配があつた。

石を拾おうとかがむと植え込みが割れ、ガサッとした音と一緒に二人の男が飛び出して、そのまま、まろぶよつに駆けていった。

僕もまた恐怖で身体が凍りついた。

洋子は震えで立つていられなくなり、僕はどうすることも出来ず、思いついたのが公園のそばにあるラブホテルだった。

「落ち着くまで、あそこで休もうか？」

洋子は軽く、硬くうなづいた。

*

僕はベッドの端に座り、椅子に腰掛けた洋子の様子を眺めていた。洋子は部屋に入つて二人きりになるとだいぶ落ち着いたものの、自分の肩を抱きつつ小刻みに震えていた。とても口のきける状態ではなく、ただ時間だけが過ぎていった。

まさかシャワーを浴びにも行けず、あんなことがあつた後でまたすぐに抱き合えるわけもなかつた。僕はただ洋子が落ち着き、息を整えるのを待つしかなかつた。

*

「ふう」と洋子は十分ほど震えた後で、身体を伸ばし、明るい顔で言つた。

「大丈夫？」

「大丈夫。私、回復は早いの。それに、よく考えてみたら、あの人

たちつて、私たちよりも前からあそこにいたわけよね。そしたら、あれつて覗きじゃなくて、ゲイのカップルだったんじゃない？」
「そうか？」と僕は植え込みから出てきた一人の様子を思い出した。
確かにあの二人は一人組のデバ龟にしては年齢差がありすぎたし、年輩の男が少年と言つていいような男を庇つて走つていく様はまさに恋人同士に違いないと思われた。

僕らは顔を見合させて笑つた。

「こつちが悪いことしちゃつたみたい」

「そうか、石投げんとつてよかつた」

「ふう。でもこれで私も、ラブホテルつて所に来たことになるんやね

「うん、一応ね」

「しようか？」と洋子は言つた。

「え？」

「冗談よ。実は今日生理なの。だからここに来たんやけど」

「なんや。期待したやん」

「したい？」

「うん」

「出来へんけど、時間までベッドの中につくつか

「服、皺になれへん？」

「上着だけ着替えるわ」

そう言つて洋子はロブを持ったままバスへと消えた。

そして戯れに灯りを消した暗闇の中で淡いふれあいとロづけだけの時が過ぎ、僕らはやや慌ててそのホテルを出た。

出たところで後ろからヘッドライトを照らされ、クラクションを鳴らされた。

近づいてくるのはローザの軽トラだった。

屈託なく手を振る洋子の隣に立ちながら、僕はさつきの公園の事件の時よりも激しく動搖した。

ローザは僕らのそばに車をつけると、窓を降ろし、

「孝弘君、帰つて来とつたんやな」とわざとひじへ、それでも自然に言った。

「はい、今晚のフヨリーで松山に戻ります」と僕もわざとひじへ、それでも出来るだけ自然に聞こえるように言った。

「これから一人で晩ご飯か?」

「飲みに行こうかつて言ってたの」

「だつたら、一人ともうちの店に来いへんか、鍋でもしようや」

「店で?」と洋子は言った。

「まだ七時やで、じゅうぶん時間あるがな」

洋子は僕の方を見て、

「行く?」

洋子の口は『行こ』と言っていた。

「いいんですか?」と僕はローザに聞いた。

「じゃ、店で待つとるから」

去つていくローザの軽トラを眺めながら、僕はこれから起らるこの禍々しさに今度は血も身体も凍りついた。

「行こ」と洋子は言った。

「うん」と、僕はやつとの思いで答えた。

*

「あんたら、あそこのホテルに入つたやろ」とローザは冗談めかして口調で言いながら、僕と洋子にビールを注いだ。

「さあ、なんのことでしょう」と、僕の顔をちょっと見た後で洋子は答えた。

僕らはグラスを合わせた。

ビールはそれ 자체の苦さだけではなく、苦かった。

「あんたら、ヨリ、戻したんか

「なんのこと?」と洋子はまた冗談のような口調で、それでも嬉しそうに聞き返した。

その屈託のなさが僕には重かった。

「若いウチはまあ、イロイロあるわなあ。羨ましいわ

「ローザだつて、まだこれからよ

「せうやうか」

「うん」

「ほんとこやう思ひ?」

「思ひよ」

「孝弘君は?」といきなりローザは僕にふつた。
すぐには返事が出来なかつた。

「もう、ローザ! なに聞いとんよ」と洋子は甘えた口調で抗議した。

「ねえ、孝弘君?」とローザは洋子を無視して言つた。

「思いますよ。これから、だつて」

「よかつた。孝弘君にもひ終わつといひて言われたらいひじょつかつて思つた」

「言ひわけないやん」と洋子は僕に代わつて言つた。

「ふう、羨ましいなあ。私も二十年前になんたらみみたいな関係を作れどつたらなあ」

「私の本当のお父さんと?」

「ううん、言ひて悪いけど、あなたの本当のお父さんはそんな関係を作れる人やなかつたし、そんなことは考へたこともない」

「革命家だしね」

「そうや。もう生死もわからんけどな。地下に潜つてもうど」

「そんな人がいきなり現れたら困るなあ、父です、とか言ひて」

「私も困るよ。でも、認知も何もしてないし、父親言ひ証拠はどうこにもないけどな」

「ごめん、驚いたやひ、こんな話」と洋子は僕に言つた。

「うん、少し」と僕は言つた。実はローザからはもつとすこい話を聞かされていたのだつたけれど。

「さ、もつ煮えたやる。豆腐はもつH Hし、魚もH H具合やと思つで」

洋子の食べつぶりから見て、美味しい鍋だつたのだつとは思つ。

けれど、ローザの言葉の一つ一つは何かを探っているようで、また何も気づいていない洋子の明るさは逆に心に重く、その日の鍋は僕には全く味がなかつた。

*

松山に戻るとサークルでは新入生歓迎行事の準備、また一回生のくせによく出入りしていた研究室では下働きが待つていて、それなりに忙しい時間が流れ、そして忙しくしている間だけは、三人でのあの恐ろしい晩餐を思い出さずにいることができた。

それが夜、下宿に一人になると、自分の置かれた位置や、やつてしまつたことの重大さが思いやられ、自分は何も積極的に望んだわけではない、結局は事態がそういう方向へと進んだのに流されただけで、自分には何も責任はない、などと、クドクドと、どうしようもないことを考えたりした。そしてそういうクドクドと考える一方では、実は何か誇らしいことをしているとでもいうような、まるで自分がドン・ジョバンニかカザノヴァかになつたような気分さえも抱き、ひとりニヤついたりした。

そして突然、ローザが下宿に来た。

「連絡も何もせんと来て、御免な」とローザは言った。「もう来んとこ思とつたんやけどな」

僕は何も言えなかつた。ローザを部屋に入れ、コタツをすすめた。
「アンタはどう思てんの？ 洋子のこと」
どう答えていいかわからなかつた。

「正直に言って」

「好きですよ」

「洋子としたんか？」

「ううん」

「ウソやろ」

「してへんて。あの時、洋子は生理やつたから」

僕はローザにあの日の状況を説明した。

説明しながら、全く説得力ないなあ、などと思つていた。

「洋子とヨリがもじつたん、こつ?」

「冬休み」

「ほんまか?」

「うん」

「なんで、そのこと、私に言えへんかったんや」
言えるわけなかつたし、今さらそんなこと言つてどうなる、と言
いたかつた。

僕は黙り込み、うつむいた。

「なんとか言うてみ」

「何が言いたいん? ローザ」と僕は顔を上げてローザを見た。

「私も」とローザは僕を見返しながら言つた。「一股かけられたこ
ともあるし、かけたこともある。そんなことは別にどうだつてええ。
その場で相手に出来るんは一人だけやし、それ以外の場所で相手が
何してようが、それをかまつとつたらお互いに窮屈や。そう思つて
これまで来たし、アンタともそれでエエと思つた。でも、洋子と
二股かけられて、これはちょっと、さすがに気分が悪い。アンタは
どう思つ?」

「僕だつて、あまりいい気持ちはせんよ。洋子とヨリが戻ったとき
はもうローザとはやめよつて思つたんやで。でも、言い出す機会
がなかつたんや……」

「言い訳やな」

何も言えなかつた。田を合わすことが出来ず、うつむいた。

「遊ばれたとか、そういう下らん」とを言つ訳やないで、世間的に
見たら、私の方がアンタで遊そんじるとしか見えへんやろからな。
もう何もゴチャゴチャ言つ氣はない。ただ、私は、寂しかつた。な
んでやる、せびしかつたんや。洋子とアンタとを両方なくしたよ
な気がして、どうしようもなく寂しかつたんや……」

フーというような、太い息を吐くような声がして言葉はどぎれ、
見れば、ローザはコタツに肘をついて両手で顔を覆つっていた。手の
甲の細かい皺が蛍光灯に照らされて小魚の鱗のように輝き、ローザ

の年を思わせた。

ローザは右手で涙を一度拭い、側に置いてあつたティッシュを勝手に一三枚引き出して鼻をかんだ。そしてまたティッシュを引き出して涙を拭った。

「洋子には、絶対、私とのことは黙つといてくれ

「うん」

「約束やで

「うん」

「それから」ローザは言い淀んだ。別れ話が出るんだろうと僕は身構えた。もう覚悟は出来ていた。

「私を……私は、捨てられとうない……今アンタに捨てられたら、私、イヤや

想像もしていなかつた言葉に僕はどう答えていいかもわからず、ただ、ローザを見つめた。

「どうせ遊びやねんから、いつでも別れられるつて思つた。けど、ちやうねん。やっぱりダメやねん。今はまだ別れとうないねん」

僕はどう答えていいかわからなかつた。

「いい歳して、寂しいねん。一人になりたくないねん。お願い、捨てんとつて、別れんとつて

僕は一切の言葉をなくした。ただ切なかつた。それまで何の実体も伴つていなかつた「捨てる」とか「別れる」とかいう言葉が、現実にはいかに生々しいか、その現場を見せつけられ、思考不能、判断不能、会話不能の状態だつた。

『『捨てる』とか『別れる』とか、そういうんじゃないと思つ』と僕はやつと言つた。

「『めん。そやせな、そういうんじやないわな

「ローザはどうしたいん?」

「これまで通り、したい

その正直さに僕は少し感動し、ローザを愛おしく思った。けれどその感動には、ローザに対する征服感というのか、そういう優越感

も混じっていた。

その日、僕らは下宿を出て飲みに行き、そのままラブホテルに泊した。

「天罰が下るやろか」と、ローザはコトを終えての枕語りで言った。

*

洋子との文通はだいたい一週間に一通ずつの割合で続いていた。ただ、洋子の手紙の方がいつもいつも圧倒的に長く、結果として、孝弘君ももつとたくさん書いてよ、と不平とも不満ともつかぬ文句が便箋に踊ることになるのだった。ただ、洋子のは手紙と言つても日常の細々としたことがつらつらと書き連ねてある日記風のもので、とてもじやないが僕にはこんな手紙を同量書くことは無理だった。

一年目の夏、僕の下宿に来たローザは、ちゅうどその日に来た洋子の手紙を机の上に見つけて言つた。

「あんたら、そんな分厚い手紙、やりとりしてんの?」

「やりとりというか、洋子のが物凄く長いんや」

「それ、読ましてくれへん?」

「そりゃダメやで。絶対に」

「洋子つたら、私には手紙も何にもくれんくせに、アンタにだけはそんな長い手紙よこしとるんやな」

「そりゃそいやで。僕だつて、親には手紙なんか出せへんもん」

「ねえ、洋子、どんなこと、そんなに書いて来るん?..」

「大学のことだけ。授業とか、先生のこととか、友達のこととか。あんまり大学、気についてへんらしいで。不満だらけや」

「ああ、読みたいなあ。だつて、洋子、何にも話してくれへんのやで。前に三人で飲んだときも、しょうもないテニスサークルのことしか話さへんかったやろ。あの子がどんな勉強しとるんか、どんな友達があるんか、やつぱり知りたいやんか。そんなことも書いとるんやろ、それには」

「もう、それはそれは細かく書いてるよ。日記やもん、まるで。」

「当たり大学ノート一、一枚にはなるんぢやつかなか」

「ああ、読みたい読みたい読みたい！　ねえ、お願ひ、一生のお願い、母親の願いや、見せて！」

「あかんて。バレたらどうなるか、恐ろしいやんか」

「バレんて。絶対にバレんようにするから」

「見せんかったら、どうする？」

「一生、アンタを恨む。一生呪つ」

僕は仕方なくローザに封筒を渡した。

これが間違いの始まりだったのか、それとも、そもそも間違った道を歩んでいたのが正道へと修正されていく、その始まりだったのか、よくはわからない。

*

二年目の夏休みの帰省、洋子と僕は春の帰省の時と同じホテルに入り、ベッドの上で今度は何も着ずに抱き合つた。僕は幾十の口づけを体中に浴びせ、すべてを愛おしむように、裏返したり、転がしたり、伸ばしたり、折りたたんだりしながら、手で、舌で、身体で、徹底的に洋子を愛した。こちらも初めてのフリをするとか、そういう余裕は逆になかった。まだ硬い洋子の身体と心をひらくにはそのくらいの努力が必要だつたし、逆に、そういう努力があつてこそ、洋子とは最初から快樂を共有することが出来たのだった。

「満足した？」と僕は聞いた。

「満足以上。自分の中にこんな感覚があるなんて、初めて知った。でも、すごく疲れた。へとへと。グニャグニヤー」

僕らは布団の中で抱き合つて息を整えた。

そして落ち着いてくると、洋子は、

「ローザがくれたアレ、どうした？」

その日はホテルに据え付けのものを使つたのだった。
まさかローザと使つたとは言えず、一瞬の間を置いて、

「アレ？　捨てた」

「どうして？」

「だって、使用期限、とっくに過ぎとつたから

「そう」「

穏やかな返事に一瞬安心すると、その安心したスキを突くよう、「初めてじゃ、ないでしょ」「

何も言えなかつた。

そしていきなり馬乗りになられ、僕の喉には洋子の両の親指が置かれた。

洋子の顔は、ベッドのパネルの灯りで下から照らされ、まるで能面の夜叉だつた。

「白状しなさい」

洋子は両手にじわりと体重をかけてきた。喉はかなり苦しくなり、どこまでが冗談で、どこからが本気か、わからなかつた。

「初めてや、ない」と僕はやつと言つた。

喉にかかつた体重が少し軽くなつた。

「誰と」

「洋子の知らん人」

「その人と使つたのね」

「うん」

「せつかぐ、ローザが、私とのために買つてくれたアレを」「ごめん」

洋子の顔には一かけの冗談も浮かんでおらず、どこかでこの手を払いのけなければ殺されるかも知れないと思つた。

「孝弘君、アナタは私にも、ローザにも、非道いことをした」

「だつて、あの時はもう洋子とは別れとつたやんか」

「あの頃か……だつたら、冬に会つたときは、もうすでに孝弘君は知つてたわけよね、こういふことを。余裕があつたはずね。向こうにも女がいたんだ」「

「もう別れたよ、とつべ」「

「ウソ!」

「ホントやつて」

「私、ローザに聞くよ」

「何を？」

「孝弘君に松山でカノジョが出来てないか」

「そんなこと」と僕は怯えながら言った。「ローザはそんなこと知れへんて」

「いいや、ローザやつたら、知つてゐるはずよ。ここを出で、すぐこの店に行く。いい?」

*

刑場に向かう罪人のように、引きずられるようにして『ローザ』につくと、僕らのただならぬ雰囲気にローザは何か感づいた様子で、「どしたん? まあ、上にあがつてビールでも飲みや。晩ご飯は食べたんか?」

「ちょっとローザに聞きたいんやけど」と洋子はいつものように甘えた口調で言つた。

「なんや」

「孝弘君、松山に女おれへんよね」

「そんなん」とローザは苦笑した。それは正に『苦い笑み』だったんだろうけれど、この場の雰囲気には實にふさわしかつた。「知るわけないわ」

「だつて、聞いて! 孝弘君つたら、向こうでカノジョ作つてたのよ」

「もう別れたつて言つたやんか」

「それで、ローザが私のために孝弘君にあげたアレ、そのカノジョと使つたんやつて」

ローザはだいたいの事態を察したらしく、僕の方を見て、安心しろ、とでも言つような笑みをよこした。

「だつて、アンタは結婚するまでせえへんつて言つてたやんか。アレだつて使用期限あるんやから、無駄にするよりはええんぢやうか」「ここでもエコロジー、言つわけ」

「ま、上がりや。干物でも焼くから、ビールでも飲んでいき」

僕らはローザが一人で晩酌していたらしいぢやぶ台についた。

「コップが出され、僕らにもビールが注がれた。

「私は、許せへん」と洋子はローザに言った。

「許さんで、どないすんの?」

洋子は黙つていた。

「許せんのやつたら、別れるしかないやんか。そんなら別れたら工
エやんか。結婚しとるわけやなし」

「ローザは、一緒に怒つては、くれへんのやね」

「だつて」とローザは軽く笑つた。「もう別れたんやひ、孝弘君、
そのカノジヨとは」

僕は仕方なく、硬くうなづいた。

「だつたら、ええやん。今は洋子だけなんやう」

僕はまた、仕方なくうなづいた。

「私は」と洋子はふてくされたよひに言つた。「結婚までとか、そ
んなことはもう思つてなかつたのに、ただ、どつちも初めてだつた
らしいなつて思つてた」

「あんたら、したんか?」

洋子は照れた様子で、否定はしなかつた。

「で、初めてやないつて氣づいたんやな」

洋子は何も返事せずに注がれたビールを飲み、コップを置いて、
ローザの晩酌のシマミラシージャコの梅肉和えをローザの箸でつま
んだ。その仕種には何か勝利者の余裕ともいいうつな落ち着きが
あつた。

僕とローザは一瞬目を見合させ、すぐにそらした。

心臓が止まりそうなほどの緊張があつた。

「ちよつと待つてな。開きがそろそろ焼けたこひや」

ローザはコンロへと立ち上がつた。ちやぶ台に一人になつた僕ら
は一瞬目を合わせた。言いたいことを言つて少し気分が落ち着いた
のか、洋子は少しテレた笑みを見せていた。

「尻尾の方が少し焦げたな。ま、焦げの部分は除けて食べて

ローザが持ってきたのはサバの開きだつた。柚子か何か、柑橘系

の香りがした。

「私、これ好き」と洋子は言い、ローザの箸をサバの腹に突き刺し、グイッと身をほぐした。子供のような奔放さだった。

「もう、行儀悪いなあ」とローザが言うと、

「お母さんみたいなこと、言わんとつてよ。ここでくらいい好きにさせて」

「で、もう孝弘君は許してあげるんか?」

一瞬の間があり、洋子は僕の方を見て、

「許すわけやない」

けれど、仕種や声色が『許す』と言っていた。

「じゃ、仲直りの乾杯しようか?」

洋子は何も言わずグラスを掲げた。

この上なくグロテスクな乾杯だった。

*

洋子は色々と反発しながらも結局はローザのことが大好きなんだということは前々からわかつていた。けれど、こんなことまでを、それもホテルを出たその顔で相談するとは、実に僕の想像を絶していた。やはり洋子は奇怪だつた。けれど想像を絶すると言えば、高三の娘のボーイフレンドに例のモノを渡すといつのも想像を絶して奇怪だつたし、結局僕は、想像を絶する奇怪な母娘の双方と、それこそ想像を絶する奇怪な関係を結んでしまつたというわけだつた。恐ろしかつた。

けれど一方では、やはり、誇らしげな気分も抱いていた。ローザにスガリつかれて以来、ベッドの中でも主導権は僕にあつたし、洋子とでは無論、こっちにあつた。何でも出来るし何でもしてくれる年上の愛人と、何にも知らないし、だからこそ好きなように教え込める処女の恋人と、その二人をほぼ同時に得て、僕は少し舞い上がつていた。

*

ローザとの、松山に戻つて最初のデートは苦いものになつた。

「わかつとつても、嫌なモンやな」とローザは飲み屋で言つた。「あんなに嬉しそうにしとるん見たら、言つてなんやけど、私ら物凄う極悪なことしとるんやないかって、思えてきたわ」

その通りだと思つた。

「洋子は初めてやつたんやから、私のとき以上に優しくしてやつたんやろ?」

返事できなかつた。

なんと答えていいかわからない。

有史以来、僕のような立場でこんな質問を受けた男が十人以上いたとは思えない。

「私が、セックスが楽しいと思えるようになつたんは、三十過ぎてからやわ。十代の頃はな、何か、因習打破! みたいな感じで、禁じられてるからこそ、むしろせなあかん感じやつたんや。言つたら、セックスは義務みたいな感じや。ちつともエエとは思わんかった。なんでこんなこと嬉々としてやりたがるんやろ、とか思いながらやつとつたな。相手の男にも愛情もなんも感じてへんかったし。それから二十代も無我夢中やつた。よう憶えてへんわ。三十過ぎて出会つた男からやな。樂しいとか、エエとか思いだしたんは。それに比べたら、洋子は二十前でもう樂しいと思える相手を得たんやから、幸せやわ。これって、母親としては喜ぶべきなんやろけど、でも、その相手が自分の相手やつて思たら、嫉妬やらなんやら、一重の意味での嫉妬やらで、複雑や。ホントに、身から出たサジとは言つても、自分のこの気持ちをどうしてエエか、全くわかれへんな

「もう、やめようか?」

言つた後で、僕は自分の発した言葉に驚いた。

「やうやな」と落ち着いた返事が返ってきた。「アンタが洋子と出来とる間は、私はやつぱり出来へんわ。でもな、お願ひがあるんや

「何?」

「洋子の手紙だけは、これからも見してくれへん?」

返事出来なかつた。

「別に、見せとうないとこはええねん。でも、洋子が大学で何しとるんかは、知りたいねん。なんか、娘の日記をのぞき見る親みたいやけど……」

この夜、ずっとローザに搔き口説かれ、結局、たまに見せると言うことで決着したのだった。

こうして、ローザとの肉体の関係は終わった。名残惜しさよりもむしろ開放感が勝っていた。

それは解放感と言つてもいいかも知れない。

今思えば、将来を束縛しあわない現在だけの関係というのは当時の僕にとってはむしろ重く、負担だった。しかも、ローザという存在は、実はそのころ松山で芽生え始めていた新しい関係への障害だとも、僕には感じられていたのだった。

*

それからは一月に一度くらいローザから電話があり、僕は見せても構わないと思われるような手紙を幾つか持つて飲み屋に出かけて行つた。

飲み屋ではローザは酒に口をつけるのも忘れて洋子の手紙に読み耽り、最後の一通をパタリと閉じて深呼吸、

「ああ」と感極まつたように、「ありがとう。ホントにありがとう」「こうこうことを繰り返しつつ、また、洋子とは帰省した時にホテルに通いつつ、四回生になつて、僕は小さな環境アセスの会社に就職が決まり、洋子は進学を国内にするかアメリカにするかで迷つていた。逡巡の分だけ洋子の手紙は厚くなり、ローザは全部を見せてくれと懇願するようになつた。

「あの子がアメリカなんか行つたら、どうじょう」とローザは氣弱な声で言つた。

「行つたつきりつてことはないと思うよ」と僕は無責任に言つた。

洋子との恋人としての関係は会うごとに冷めていたし、お互に新しい相手がいることも暗黙のうちにわかりあつていた。ただ惰性と、想い出を共有する相手への未練と、そして別れ話を言い出すき

つかけの欠如とで、関係を続けていただけだった。

洋子がどこへ行こうが僕にとってはそれほどの問題ではなかつた。「いや、あの子はアメリカに行つたら、向こうの方がエエに決まつとる。あの子の感性は日本人離れしとるから」

「うん。それはそうかもね」

「やろ。ああ、どうしょ」

「洋子、ローザには相談したりはせんの？」
「するもんかいな。お姉ちゃんにも何も言わへんらしいし。アンタだけやで。こんなこと知つとるんは」

*

そして洋子はアメリカの大学院に行くことになり、手紙で知らせてきた。

飲み屋でそれを読むなり、ローザは、

「アカン、アメリカは、アカン」

そういうて絶句した。

次の朝、下宿の電話に呼び出された。

松山に来て初めての、洋子からの電話だつた。

「私の手紙、ローザに、ずっと見せてたのね」

脳から血の気が引いた。スースと引く、その音さえも聞こえたほどだった。

「ローザと出来たのね」

違う、と言いたくて、何も言えなかつた。

「ローザに伝えて。昔から親でも娘でも、なんでもなかつたけど、やつぱりあなたとは他人でしたつて。他人でなきや、こんなこと汚らわしくて、あんまりですつて。もう一生、あなたたち二人に会うことはありません。お幸せに」

切れた。

これ以後、十七年の間、僕は一度も洋子の声を聞くことはなかつた。

*

『偲ぶ会』での洋子の話はローザの最期に入っていた。

「……トイレに立ったローザの帰りが遅いので、皆で探しに出たそ
うです。……ローザは畑の向こうの崖から河原へ落ちていきました。
救急車を呼びましたが、即死に近い状態だったそうです。……一緒に
暮らし始めたときから覚悟はしていたつもりでした。いえ、その
日のために一緒に暮らし始めたようなものでした。でも、こんなか
たちで最期が訪れるとは、本当に信じられませんでした。この時初
めて、私には覚悟もなにも全く出来ていなかつたことを思い知らさ
れたのでした。今日この会を発起していただき、篠原さん、佐伯
さん、村山さんのお三人がいなかつたら、私は何をどうしていいか
さえ、わからなかつたことでしょう。本當にお三人には感謝いたし
ます。……今日、ローザが逝つて三ヶ月が経ち、それでも私にはま
だ信じられないのです。私の中ではまだローザは死んではないの
です。私の中のローザはまだまだ生きていて、私の仕事に文句を付
け、料理に文句を付け、化粧が濃いと言つては難癖を付け、してい
るのです。……こんなふうに、皆さんの中に、一人づつ、ロ
ーザがいるんだろうと思います。その一人一人のローザを偲んでい
ただく会にするはずでした。でも、これは私のワガママに過ぎませ
んが、私のローザについて、私の知つているローザについてだけは、
皆さんと共有したかつたんです。皆さんには、私のローザを知つて
いただきたかったんです。今日、私は生まれて初めてです。こんな
に長くローザのことを話したのは。……きっと、私にしか話せない
ローザがいて、皆さんにしか話せないローザがいて、けつして一人
じゃないローザがいて、そういうローザの人生だつたんじゃないか
と思います。……今日はどうもありがとうございました」

万雷の拍手を浴びながら洋子は席に戻つた。司会も、還暦ダコも
還暦ナマズも泣いていた。ただ、僕は泣けなかつた。洋子が話の中
で意図的に避けていた部分の重さが、僕にただ悲しむことを許さな
かつた。

「大変感動的なお話で」と司会がマイクに戻つた。「私自身、言葉

をなくしてしまいました。今はちょっと何も言えません。皆さまは、

これから、だいたい九時まで、この会場をとつておりますので、ご自由にご歓談の上、ローザを偲んでいただけたらと思います」

還暦ダコがまた僕に話しかけたそうにしてビール瓶を差し出して
いた。僕がコップを向けると、

「洋子ちゃんは、立派だねえ」

「ええ

「でも、あれで、まだ一人らしいね」

「そうなんですか？」

僕は本当に驚いて言った。発起人三人の名前で『偲ぶ会』への招待状を貰い、参加しますのハガキを送り返しただけで、今回、洋子との直接のやりとりは何もしていなかつたから。

「なんだ、そんなことも知らないのか

「ええ、実は今日、洋子さんは十七年ぶりなんです

「十七年！ そりやすごいや」

「おい、また若い人に絡んではないか」とまた還暦ナマズがやってくる。

「この若い人、洋子ちゃんと十七年ぶりなんだってよ

「ワシらやって二十五年ぶりやろ」

「そうか…… そうだな」

などと言っている間に洋子が来て、

「今日はどうもありがとうございます」

などと言いつつテーブルのビール瓶を持ち、還暦ダコが『もうウイスキーだから』とグラスを指すのには軽く会釈して、還暦ナマズのコップに注ぐ。

「今聞いたんだけど、この若い方と、洋子ちゃん、十七年ぶりなんだって？」

「ええ。まあ、事情は、とっても複雑なんです。ね？」

「僕に。

「ちょっと、ですけどね」と僕は還暦ナマズへ返事する。

「じゃ

」と洋子は僕にも注ぎつつ、「いきなりだつたんで、ビック

りしたでしょ。あなたの住所、高校の同窓会名簿で調べたの」

「ああ本当。でも、連絡とつてくれて本当に良かった。洋子さんも、

大変やつたね。日本に帰ってきたなんて」

「最初はイヤやつたけど、今では良かつたと思ってるよ。ローザと最

期の十年、一緒に過ごせたしね」

「十年ね。でも最期は残念やつたね」

「うん。あんな形で終わるとは思いもせんかったから

「ホントやねえ」

「孝弘君は、結婚したんよね」

「もう中学の息子と小学の娘がいてる

「息子さん中学生なん！ そつかあ。卒業してすぐに結婚したもん

ね

「知つてたの？」

「典子つて憶えどる？ あの子が知らせてくれたんよ。お節介やろ。お

私、アメリカで、ちょっとショックやつたんよ、実は

僕は何も言わず洋子の顔を眺めた。老けたという感じではなく、年相応に綺麗になつたという印象だった。

「お仕事はどう？」と端正に紅の引かれた唇が言った。

「ボチボチやね。でもこれから公共事業減るやろ。アセスの仕事も減つて行くやろからね、田舎の会社やし、みんな心配してるよ。これからどうなることかって

「心配ね。でも、そんな状態で来てくれたんやね。今日、泊まりでしう？ 明日休みとつたの？」

「うん。まあ、月曜日つてのはあまり仕事無いから」

「本当はこの会、土曜日にしたかったんだけど、会場が空いてなくて、それに、もう勤めから降りてる人が多いから、日曜でもいいかつて、今日にしたのよ」

「いいんじゃないの。僕のこと言えば、そうでもしないと休みはなかなか取れないから、ありがたかつたけど」

「やう言つてくれると嬉しいわ。じゃ、そろそろ御免なさい。あち
こち回らなあかんから。今日はありがとう。たくさん飲んで食べて、
楽しんで帰つてね」

そう言つて洋子は立ち上がり、

「あ、そつそう」とまた戻つてきた。

「孝弘君、メアド持つてたら、教えて」

僕はメアドの載つた名刺を渡した。

「ありがとう、じゃ」

洋子はこんどこそ隣のテーブルに去つた。

「なんちゅう、なんちゅう、エエ女になつたんや」と還暦ナマズが
感極まつたように言い、還暦ダコがうなづいた。

確かに、言葉づかいといい、身だしなみといい、立ち居振る舞い
といい、洋子は同じ年頃のローザとは対極の、実に上品で洗練され
た女性になつていた。

*

『偲ふ会』は九時すぎには終わり、洋子以外に誰も知己のない僕は
二次会にも行かず、実行委員会が予約してくれていた、宴会場と同じ
ホテルの自分の部屋に戻つた。そしてシャワーを浴びて浴衣に着
替えセミダブルのベッドに腰掛け神戸の夜景を眺めると、それが
学生時代にフェリーからよく眺めた夜景と重なり、まるで一十年の
時が一瞬で蒸発したようだつた。僕は二十歳からこちらのままで、洋
子も若い今まで、そしてあのころのローザがすぐそこにいるような
気がして、切なかつた。

*

十七年前、洋子からの最後の電話があつた日の夜、下宿で「絶縁
やつて。もう、電話にも出でくれへん」と大泣きするローザを慰める
言葉は僕にはなかつた。

「天罰やろか」とローザは言つた。

涙と鼻水とで崩れたローザは極端に醜く、こんな女と一時期でも
肉体関係を持つていたことに思い至り、その時僕は猛烈に後悔した。

「東京に行つて、ちやんと説明したら」

「聞いてくれると思う？」

「わからへんけど。それしかないんちやうか。もう俺は二度と会わんつてことで、洋子に許して貰うほか、ないやろ」

長い沈黙があつたのは良く憶えている。

その夜でローザとの関係も切れた。

数日後、洋子から、僕宛の手紙を全部返してくれ、とだけ書かれた手紙が来て、段ボール箱一箱分の手紙を送り返し、洋子とはこれで完全に切れた。

いつも洋子ともローザとも切れ、何かスッキリした気持ちで僕は当時の松山のガールフレンドとの関係を深め、そして卒業し愛媛の会社に就職して、このガールフレンドと結婚した。それからはずつと同じような日が過ぎ、同じような週が過ぎ、同じような月と年が過ぎ、今年もまた去年と同じように過ぎていくものだと思つていた、その繰り返しの日常を引き裂いたのが『怨ぶ会』の案内状だつた。それはまるで二十年前から飛んできた刃物のように僕の胸に突き刺さつた。このハガキを受け取つて、僕はひどく混乱し、逡巡しきりぎりまで返事を出すことができなかつた。

返事を出してからも、本当に「出席」でよかつたのだろうかとまだ逡巡は続いていて、そしてその逡巡の感覚は『怨ぶ会』そのものが終わつてしまつたあとでもまだ消えてはいなかつた。

*

部屋のドアがノックされた。

洋子？ と期待して駆け寄り、確認もせずに開けた。

「ごめん、ちょっと匿つてくれへん？」

僕の顔を確認するなり、洋子は返事を待たずに滑り込んできた。

「どうしたん？」

「閉めて！」

廊下から『洋子ちゃん』と叫ぶ声が聞こえ、僕はドアをいそいで閉めた。

廊下を通り過ぎる『洋子ちゃん』の声が消えていくのを待ちながら僕らは顔を見合わせ、そして笑みを交わした。例の『呆れた』

ポーズで笑う洋子は十年前とまるで変わっていなかつた。

洋子に歩み寄ろうとして、再びドアがノックされ、油断していた僕は「H-H-U」とでも言つような、みつともない声を上げてしまつた。

覗きレンズから見ると還暦ダコと還暦ナマズだった。

「はい、どなたですか？」

『あ、こ、あの若い人や』と還暦ナマズの声がした。『ちょっと開けてえな』

「少々お待ち下さい」

洋子はクローゼットに隠れる、といつ身振りをした。

ドアを開けると、いきなり還暦ナマズが部屋を覗き込み、

「洋子ちゃん、来てへんか？」

「いえ」

「あれへんのや。ちよつと『出でていつて、部屋にも戻つて来いひん。どつかの部屋でつかまつとんちやうやうか思つてな』はあ

「もういいよ」と還暦ダコ。「洋子ちゃんも迷惑かも知れないよ、で、アンタ一人？」

「ええ」

「洋子ちゃんはもういいから、もう少し飲もうよ」とウイスキーの瓶をかけ、「俺は若い人のローザの想い出話を聞きたいナア。だつて、僕らが知つてるのは二十歳前のローザだけなんだよ」

「アンタは、ローザ、知つてはるの？」

「ええ、少し」

「ほらね、一次会じや、僕らの話、聞かすだけだったじゃない。僕は聞きたいナア」

「でも、僕、明日が早いんで」

「マアちょっとだけいいじゃない

押し問答をするのもどうかと思われ、僕は一人を中心に入れた。

*

部屋にあつた湯飲みやコップを動員してウイスキーを注ぎあつた。テーブルの椅子には一人が座り、僕はベッドの端に腰掛けた。クローゼットの中の洋子を思つと腰掛けるどころではなかつたけれど。

「HH景色やな。ワシラの部屋、山しか見えへん」

「高二の頃、洋子さんにつれられて、ローザさんの店に行つたんですよ」

僕はこの一人を早く追い出したいくて、自分でも唐突だと思いながらローザの話を切り出した。

「いや」と還暦ダコは僕の言葉を遮つた。「ここだけの話、アナタ、ローザと寝た?」

僕はいきなりのことに驚き、還暦ダコを見据えつつ首を振つた。

「ほら、若い人はもう、そんなんちゃうて」

「ワシラはようお世話になつたもんやけどな。今日来とつた連中、ほとんどはローザにお世話になつとつたんぢやうか」

「洋子ちゃんの父親だって、それが誰だか、本当のところはローザにもわかつてなかつたと思うんだ。だから、洋子ちゃんはみんなの子供なんだよ」

ナマズとタコは、しばらくの間グネグネとウネウネと洋子の父親探しに興じ、醜悪だつた。いつ洋子がクローゼットから飛び出してこないかと、気が気じやなかつた。

「まあ結局、わかれへん言つことや。やから、ローザからカンパ無心されても、みんな断られへんかつたもんな。洋子ちゃんのため、言われたらな。それにそれを洋子ちゃんは無駄にせんかつた。アメリカで博士やで。洋子ちゃんはみづやつた、偉いわ」

「すみません、ホントに明日、早いんで

「そうやな、スマンかつたな」

二人に握手を求められ、僕は応じてすぐに廊下へ送り出した。ドアを閉めると、廊下から、

『なんや、お前らそこか』

『ああ、洋子ちゃん、帰ってきた?』

『いや、まだ。そこにおりたんちやうの?』

『いいや。どー行つたんやろな』

声が遠ざかるまでドアに張り付き、振り返ると、椅子に座つた洋子は「一人が残していつたウイスキーを湯飲みに注いで舐めていた。

「行つた?」

「うん」

僕は洗面所で手を洗い、ナマズとタコの感触を洗い流した。そしてテーブルにつき、セッキと同じコップにウイスキーを注いだ。洋子と目を見交わすと、本当に十七年ぶりとは思えない気持ちの近さだった。

「ローザつたらね」と洋子は軽く笑みながら言った。「私の養育費、何人もから、とつてたみたい。私には、革命家で連絡つかへん、なんてウソついで」

「あれ、ウソだつたの?」

「向こうは信じてるけどね。今日来てた現役三人も、その、地下に潜つた人のメッセージを持つて来てたのよ。さつき部屋で読んだんだけど、もう、かんつべきにオカシイの。この革命的状況の中、洋子さんが米帝国から帰つてこられたと聞き安心しました、日米間の帝間戦争も間近く、云々よ。何かね、聞いたんだけど、地下に何十年も潜り続けるなんて、世界でも例がないらしいのよ。亡命とかはあるけど、自分の国に何十年も潜り続けるなんて、ね。やっぱりオカシくなるわよね。その手紙、最後になんて書いてあつたと思

う?」

「さあ

「これは水溶紙です。読み終わつたらトイレに流してくださいって

「すごいね」

「私、思たわ。この人だけは父親ちやうやろつて」

僕は軽く笑つた。

「私もね」と洋子も少し笑つて続けた。「不思議に思ったことあつたんよ。どうしてあんな八百屋だけで暮らして行けるんやろつて。アメリカから帰つてきたでしょ。で、家計の内実知つてビックリよ。ものすごい額のカンパよ。大学卒業までの養育費は払い終わつても、向こうにしたら、大企業の管理職とか、大学の先生とかじゅない。若かつた頃の新左翼の経験なんか、やっぱり隠しておきたいわけよ。おまけに子供の事なんかで後ろ暗いことがあつたら、ローザが取りに来たカンパ、断われるわけなんかないよね。もうこれはユスリ以外のなにものでもないわ」

「ふう」と僕は少し呆れて言った。

「出生届、出さへんかったんやつて、なんかエラそうな理屈つけてたらしいけど、実際の所はわかれへんやる。男一人からの認知を拒否しよう思たら、出生届出さへんで、戸籍を作らへんのがいちばん安全やから」

「そこまで！」

「すると思うで」と洋子は余裕の笑みを笑んだ。「そんなんで、ローザが死んだ後になつて、あんな男らから、洋子ちゃんはみんなの子供や、なんて言われても、心底ゾッとするだけやわ。今日一日堪えようて思てたんやけど。やっぱりあかんかった。自分の部屋に戻つてたら、の人たち追いかけてくるし、おらんフリも気が疲れるんで、部屋割り見て孝弘くんの部屋に逃げて來たんよ。ごめんね」「いいよ。洋子さんと二人で話が出来てよかつた」

僕らは湯飲みとコップを打ち合わせて乾杯した。

「十七年ぶりやねえ」と洋子はしみじみとした口調で言った。

「ローザとは絶縁してアメリカに行つたの？」と、僕はずつと心に引っかかっていたことを聞いた。

「ううん。孝弘君には悪いけど、全部あなたのせいにして、すぐ仲直りしちゃつた。ごめんね、驚いた？」

別に驚きはしなかつた。ただ、なんとなく脱力した。

「血は水よりも濃いつてことやね」と僕は他人事のように言い、「

結局、ローザにとつて、僕つてなんやつたんや？』と本氣の問いを被せた。

「孝弘君、最近まで、たまに話題になつてたよ。アンタさえいなかつたら孝弘君は私のものになつとつた、とか言つて」

僕は苦笑してウイスキーを舐めた。

「孝弘君の子供なら、もう一人作つてもよかつた、なんて言つてたのよ。あの子は食べ物に氣をつけてるし、まだ遺伝子も痛んでない、なんて」

「ああ、遺伝子ねえ。良く聞かされたよな。遺伝子が傷ついたら奇形児が、とか、ガンになるだとか」

「私言つたのよ、体細胞と生殖細胞は違うのよつて。それに、自分の子孫が云々なんて、そんなの悪質な血統主義、優性思想じゃないのつて。さりに言えば、奇形児云々は、今そこにいる障害者への差別よつて」

「なんか、懐かしいね、そういうの」

「懐かしいなんて！ 私はほんの三月前まで、そういうのをやつてたのよ。そうそう、ローザつたら、私に、孝弘君の子供だけでも作つておいたらよかつたのについて、そんなことも、つい最近まで言つてたわ」

洋子は軽く笑つた。

「ところで、孝弘君、『ご実家は？』

「公務員住宅に親父の定年までいてね、十年前から、兄貴らの買つた西区のマンションにみんなで同居してるよ。親父が寝たきりで、子供三人やろ、狭いマンションやから、俺一人泊まるスペースもあれへん。あれはもう実家やなくて、兄貴の家やね。やから、今回もホテルの泊まりにしたんよ。で、洋子さんのお父さんお母さんは？」

「弟夫妻と同居してる。『コンビニやからね。一人ともたまに店に出て、大変よ』

「なんか、お互い歳とつたつて感じやなあ」

「感じ、やなくて、歳、実際にとつたんよ」

「でも話してると、全然、十七年ぶりって氣もせえへんね
ホンマや。このまま垂水の辺り、ウロチョロしてそりやね
うん」

「ねえ、明日、本当に垂水のあたり、ウロチョロしてみない?
え?」

「垂水のあたり。孝弘君に、帰るまでに時間あつたら、だけど
それを聞いて僕は何か清々しい気持ちになり、

「ああ、それはいいね」と返した。

高校の教室の窓いっぱいに広がった、晴れた日の明石海峡の眺望
を僕は思い浮かべた。（つづく）

第三章 光の海峡

愛媛に帰り、数日して、洋子からメールが届いた。

*

某月某日

孝弘様。

先日はローザの『懐ぶ会』に来ていただきて、ありがとうございました。

次の日も舞子まで付き合つてもうつて、ほんとうに嬉しかった。実を言つと、貴方を呼ぶかどうしようか、かなり悩みました。『懐ぶ会』そのものは完全に場違いな雰囲気になるでしょうし、それに、なにより、あんな別れ方をした貴方と、いつたいどんな顔をしてお会いしたらいいか、わかりませんでしたから。

でも、あのちょっとしたアクシデントで貴方の部屋に逃げて行って、久しぶりにお話も出来ましたし、今では、お呼びして、再会して、よかつたと、心から思っています。

さて、これからは、少々長いメールになると思います。

この間もお話しした、私のローザへの複雑な気持ちを少しでも整理するためには、こうやって、私もローザもよくご存知の貴方に手紙を書くことがいちばんじゃないか、などと、勝手に思つているのですから。ごめんなさいね。こちらの勝手な都合でこんなものを送りつけて。ご迷惑ですか？なんて聞いてみても、もうこれを開いちゃってるからすでに遅いか……。

この間も言いましたように、私のきょうだいたち、姉と弟ですが、このふたりは父の連れ子で、私との血縁関係はまったくありません。先日は言わなかつたのですが、実は、母は二十歳の頃の交通事故がもとで、妊娠、出産は無理だと言わっていたらしく、相手に連れ子がいることはむしろ嬉しかったと言っています。一生結婚は出来な

いだろうと思つていたとも言ひますし、その意味では、前の結婚相手と死別していく小さな連れ子のいた父は理想の相手だつたのかも知れません。「お見合いの、その場で決めたのよ」などと母が昔言ったとき、私は、「その場で」なんて、あまりに極端な話だなあと感じたことを憶えておりますが、ただ、今となつて色々と考え合わせれば、さもありなんとも思えます。もちろん、母が妊娠できない身体だつたと聞かされたのはずつと後、日本に帰つてくる直前のことではあるのですが。

そのことに関わつて、ローザに対する母の感情に何かかなり複雑なものがあることには、これはもうかなり前から気づいていました。だつて、どう考えてみてもヘンでしょう？　なぜ私は母のもとですつと育てられたのか。ローザは福井から神戸に帰つてきて、どうして私を引き取らなかつたのか。コミコーンはとつぐに無くなつてたんだし、ローザはずつと結構な額を男達からむしり取つていて、そのお金は、全部とは言わざとも、かなりの部分は母の方に送つていたと聞きました。だつたら、その氣さえあれば、いつだつて私を引き取ることは出来たはずなのに。

『偲ぶ念』では言ひませんでしたが、十年前、ガンの疑いがあつて私に電話してきたとき、ローザは言つたものです。

「お姉ちゃんは、私をどつかで憎んじるから、本当のこと、言つてくれへんかもしれん」

「そんなこと、ないでしょ」「って私は言ひましたけど、

「いいや、本人も気づいとらんけど、憎んじる。だつて、あの人があ事故で生死の境をさまよつて、そのあげく妊娠は無理な身体になつたその年に、私はアンタを、結婚もせんと妊娠したんよ」

私は母のその事故のことを初めて聞かされ、絶句しました。

「私のおなかが大きくなつて来てんのを、お父ちゃんとお母ちゃんは、それにお兄ちゃんも、なんか薄気味悪い化け物が入つとるみたいな目で見てたのに、お姉ちゃんだけは、違つた。触らせて、言

うて、私のおなか撫ぜながら泣いてたこともあつたんや。あの人は、心底、優しい人やから、自分の中に人を憎むような感情があることを認めよつとせえへんだけや。アンタを結局私に返さんかつたんかで、そいや。今回も、私のことを気遣うようで、いいや、本氣で気遣つてくれながら、私に良かれと信じてウソをつきかねんつて、私はそう思つんや」

もちろん、こいつことをいへら言われたつて、帰れないものは帰れなかつたんで、母が付き添つて病院に行つて、それでもきちんと病状を聞けたわけで、結局はローザの懸念は杞憂だつたわけですが、でも、私は、この電話以来、すべてのわだかまりの一つ一つが、スッキリと関連づけて眺め渡せるよくなつたんです。

ローザは、あの世代にしては珍しく二人きょううだいで、上のお兄さんはかなり歳が離れていましたから、母とは実質上一人姉妹のようなものだつたといいます。小さい頃から仲も良かつたらしく、ローザが神戸に帰つてきて店を開き、家に週一回の宅配に来るようになつてからも、よく一人が台所で話しこんでいるのを見たものでした。ただ、表面上、というか、意識の上では仲良くしていても、もつと心の奥底のドロドロした部分では、また違つた感情があつたのではないか、と今では思つています。『偲ぶ会』でお話ししたセンチメンタルジャー二ーだつて、あの時、家に何の連絡もしなかつたのは、単にローザが非常識だつたからと言つだけではなくて、ああでもしなければ、私との旅行さえ母は認めなかつたからじゃないか、とも思うのです。

結局聞けませんでしたが、あの時、ローザは私を取り戻したかったんじゃないかな。

でも、結局思いどおりまして、母のもとに返したんじゃないかな。

私にはそう思えてならないのです。

御免なさい、長いメールになつちゃいました。

そのうち、またメールしてもよろしくでしょうか？

某月某日

洋子様

メールありがとうございます。この間は懐かしくて、僕も嬉しかった。

貴女のお母さんの話は初めて知ることで、驚きました。

僕のように、フツーの家庭にフツーに育つたものには思いもよらない世界です。

僕は就職して以来ずっと現場一筋で来まして、ワープロを触りだしたのも最近で、貴女のように文章をスラスラと書くことは出来ないでの、返事は短いものになるとは思いますが、これからもメールは興味深く読ませていただきます。

いつでも送って下さい。
ではでは。

某月某日

孝弘様

お返事に甘えて、また今回も長いメールを送らせていただきます。
まずはご連絡。

来週、私、結婚します。親戚だけを呼んで、簡単な式をします。相手はもう五年も付き合っている同僚です。日本に帰ってきてから十年、仕事も忙しかったし、ローザのことはあるしで、結局、こんな歳になってしまいました。貴方が大学卒業してすぐに結婚されたのとは対照的で、別れてからのお互いの人生行路を思うと、本当に感慨深いものがありますね。

蒸し返すようですが、私はずっと貴方を恨んでいました。
だって、実の母と二股かけられたんですよ。

これは恨みますよ。おまけに私の手紙を見せてたなんて。
いえ、別に、こんなことを書いたからと言って、貴方に謝らせたいとか、そういう下心があるわけじゃないんです。二股と言えば、

私も、東京に、カレシに近いような、違うような男がいましたからね。今となつては、こいつにティよく遊ばれただけなのかもしれませんが、いちおう身体の関係もありました。まったく、人のことは言えませんよね。

死ぬまでの十年をローザと共に暮らした今では、若かつた貴方もきっとローザに振り回されてたんだろうな、と、状況をなんどなく理解することができます。ひどい話ですが、生前、ローザは、よく、貴方とのセックスがいちばん良かつたなんて、自慢げに言つてましたもの。

「あんなイイ男と別れるなんて、アンタもバカなことしたな」って。別れる原因を作つたのはあなたでしようつて、言いたくなりましたけどね。

でも、正直なところ、どうだったの？ ローザに、そんなによくしてあげたのかな？ 私は、貴方とはたまにしか会えなかつたし、きちんととした関係を作つていくには、東京と松山じゃあまりにも距離がありました。最初から無理だったのが、ローザが間にいることでややこしくなつただけなんでしょうね。そういうことを理解できるようになつてからは、もう貴方を恨むのはやめました。

御免なさい、びっくりさせちゃいました？

この話は終わりにしましょう。三人だけの、と言つても、ローザは死んじやつたから、一人だけの秘密ですね。これで封印します。

それより、ローザの最期のこと、この間は話せなかつたことを。アウトライインはこの間『愚ぶ会』でもお話した通りで、私はあれは純然たる事故だと思っています。けれど、状況が状況だつただけに、しかも、なんと言つても、今に続く過激派を作つた元幹部で、おまけに、これは死んでからわかつたんですけど、現役とのつき合いも完全に切れたわけではなかつたようで、そんなこんなで、警察は当初、他殺の線でも動いていました。そうそう、現役と言えば、十数年前まで、ローザって、年に一回くらいの割合で家宅捜索を受

けてたんです。だつて、現役の誰かが捕まつたとするでしょう、そしたらその住所録なんかにローザの連絡先が載つてたりして、当然、ローザにも家宅捜索が入るというわけです。私と暮らしている時期にはもうありませんでしたけどね。ローザがずっと離れて暮らしていたのには、私をそういうトラブルに巻き込みたくないってのもあつたのかも知れませんね。

さて、ローザの最期で問題だったのは、なぜ、トイレと反対側の崖に行つたのか。

それと、これはあまり男性に言つべき「アレじゃないかも知れませんが、なぜ下半身裸で転落したのか。

この一点で、これじゃ、警察でなくとも怪しみますよね。

調査はなかなか進みませんでした。だつてローザの友人たちが、刑事、と聞くなり態度を硬化させて、状況の正確な把握を難しくしてしまつたのです。あれが本当の事故死だと結論が出るまで一週間くらいかかつたんじゃないでしょうか。

ありのままを書けば、あの飲み会の会場は昔のままの農家ですから、トイレ、とこうか便所は、夜はひどく暗くて、おまけに遠いし、で、つい畠の畦でキユウリの苗に隠れて……ところが酷く酔つている上に、下ろしたズボンにも足を取られ、転落、したのだというのが警察の結論です。私もそうだろうと思ひます。

貴方にこんなことを白状するのはなんですが、私もその飲み会の農家で、かつてローザからそういうやり方を習つてましたしね。まったく、男性たちの言つ、連れシヨンです。降るよつた星の下で、山の風に吹かれて、気持ちよかつたな。

ローザの最期は、確かに残念の一言ですが、ローザらしい最期だと言わればそうかもしれないし、今ではこれも納得しかけています。

御免なさい、尾籠な話で。

ついでに。

結婚は、今流行りの「できちやつた婚」でもあります。

それでは。

某月某日

洋子様

まずは謝つておきましょ。振り回されていたのはその通りですが、私自身もいい気になつていた部分もありました。手紙も、見せるべきではなかつた。御免なさい。

ローザが亡くなつたのは本当に残念です。

生きているうちにもう一度会いたかった。

それから、最後になりましたが、ご結婚おめでとうござります。
お幸せに。

某月某日

孝弘様

お祝いの言葉、ありがとうございます。

昨日から、ローザと暮らしたマンションに主人がほとんど身一つで入居して来て、何の新味もない新生活がスタートしました。

先日の結婚式では、いい歳した娘の白無垢姿に感極まつた母が泣き出してしまい、言うにことかいて、

「ローザにも一目見せてやりたかった」

ですって（もちろん、母は「ローザ」なんて言いません。ローザの戸籍上の名前で言つたんですけど）。

ローザが見たらなんて言うか……。主人はガチガチの近代科学者で、こんな人間をローザが気に入るわけなんかないし、だから付き合つていることも黙つてました。それに、相手が誰であれ、結婚するなんて言つたら、きっと、籍は入れるんだの、別姓やれだの、訳のわからないことを言つてかき乱しただらうことは想像に難くありませんしね。それが神前での白無垢なんて見せてりや、大騒ぎでしょ。

ローザが亡くなつてまだ半年だというのに、結婚をこれほど急い

だのは、実は、父の病状が思わしくなく、生きているうちに、この行き遅れの娘の花嫁姿を見せてあげたかったというのが、いちばん大きな理由です。私自身はと言えば、ちゃんとした結婚にあこがれはあつたものの、今のこの主人との関係が、その「ちゃんとした結婚」に値するのかどうか逡巡があつて、なかなか結婚にまでは踏み切れなかつたのです。

主人は私の上司ですが、極めて有能な、職場では見ているだけで腹の立つ男です。まったく、何度もこの男に叱りつけられて煮え湯を飲ませたことか。有能なのに、その言動から何をやっても憎まれる、実に損な性格の男で、それが祟つて四十過ぎまで独身だったと言われています。ただ、外見だけはカワイイので、会社では「ポチ」と呼ばれています。

私はポチと出会つて、自分の限界を知りました。私がいくらがんばっても、この男には絶対に勝てない、と。だったら、ポチをずっと陰から応援する立場になつてもいいんじゃないか、と。それにもう、会社勤めは疲れました。いい歳して連日の徹夜はこたえます。

と言うわけで、ローザの店は、私が会社を辞めて継ぐことになりました。ポチにとつては、出来の悪い部下が去り、兼業主婦がやつて來たつてところでしうか。もちろんポチは有機農法の店なんかには反対してますけどね。あんなのはただの原始回帰志向の非科学だつて。まあその通りなんでしょうが、非科学で癒される心だつてありますからね。

それでは、今日はこの辺で。

某月某日
洋子様

新婚生活がスタートしたみたいですね。
心より嬉しく思います。

こちらは相変わらず十年一日の「」とき日々が続いています。
あれから二十年が過ぎたなんて、ウソみたいです。

ではでは。

某月某日

孝弘様

先週、父が永眠いたしました。

ローザと母との間に挟まれ、自分の置かれた位置に戸惑つこともあつた私を、いつも私の立場に立つて、しつかりと支えてくれた、優しい、優しい父でした。父がいなければ、私はもつと早くあの家を飛び出していたことだと思います。

父は血のつながりがない分、私を特別に可愛がってくれたのではないかと思う節さえあります。姉も、弟も、留学はあるか、四年生大学にさえも行かなかつたのですよ。小さい頃から、私は父から、「洋子は賢い」「洋子は頭がエエ」と言われ続けてたんですけど、これつて、あの二人は賢くなくて、頭が良くないつてことになります?でも姉も弟も、嫉妬はしなかつたつて言つてます。私はもともと違う人種だと思ってたつて。思えば、それはその通りかもしれませんね。今、姉は看護婦、弟はコンビニの店長で、どちらも子供が三人もいます。みんな口口口とした、濁りのない素直な子供たちです。

何かの本で、子供のいない夫婦は、どちらかが母親を憎んでいるんだ、なんていう文句を読んだことがあります、私があれほど「ちゃんとした結婚」に憧れながらも結局はこの歳になるまで踏み切れず、子供ももうけなかつた理由の一つには、もしかしたら母との関係もあるんじゃないかと思うこともあります。母というのは、ローザじやないですよ、育ての母のことです。ああ、ややこしい。

このことを説明するのに、ちょっとした枠組みを用意しましょう。人間には「コントロール型」と「コミュニケーション型」の二つのタイプがあると思いませんか?他人をコントロールしたいタイプと、他人とコミュニケーションしたいタイプ。まあ、露骨に言え

ば「支配」志向と「交流」志向つてことになるんでショウガビ、こうピチッと分けることは出来なくても、どちらの要素が多く含まれてるかで、身近な人たちの性格をある程度理解できるような気がするんです。

で、ローザが「コントロール型」の皮を被った「ミニミニケイション型」だったのと対照的に、母は、「ミニミニケイション型」の皮を被った「コントロール型」だったと思つんです。

ローザは昔新左翼の幹部をやつてたほどで、表面だけからは「支配」志向だったよう見えますけれど、実際には、人を自分の思うように動かそうってタイプじゃありませんでした。確かに、一見、押しつけがましくて、ワガママで、「コントロール型」って感じなんんですけど、よく見れば、あれつて、相手の反応欲しさなんです。相手に答えて欲しくてああいう態度に出てるんで、実際には「ミニミニケイション型」でした。だから早々と政治からは引いて、ミニミニケイションやつたり、八百屋やつたりしてたんだと思います。

それに対して母は、人の話は良く聞くし、控えめだし、表面だけからは「ミニミニケイション型」だと思えてしまうんだけど、本當は、周囲を自分の「愛」でコントロールしようとしてるんです。實際、母は、「愛」という真綿で私をがんじがらめにして、自分の思うようにコントロールしようとしてましたからね。それに、私自身にも、もともと、あのミニミニケイションから救い出してもらったという負い目があつたから、だから、この恩を返すためにも、この母を悲しませてはいけない、この母の望むような子供にならなきやならないつて、ずっと、母の望むような子供にならうつて、してきたんですね。もちろん、そのことでつらい思いなんか、したことないですよ。でも、私の心からば、ある種の自由さが消えてしまったんです。いつも、私は、私がこうしたら、母はビックリだつて、そればかりを気にしてました。

だから、貴方と抱擁しあつた最初の日、母と田を合わすのが辛かつた。母は気づいたんじゃないかと何度も思い、そうじゃないみた

いだとわかり、でも、逆にそうなると、どうして気づいてくれないと少し憤つてみたり。初めてキスした夜もそう。初めてセックスをした日もそうでした。母にバレないかと恐れながらも、実際には、気づいて欲しかった。母に知つて欲しかった。つまり、私は、心の奥底を母にしつかりと掴まれ、常に母の視線を背後に感じながら、母のコントロール下で生きていたんです。

姉や弟はこんな想いはしていないらしく、説明しても理解してもらえない。ということは、こういう「愛」の注がれ方をしたのは私だけかも知れず、これは、やはり「血」なのかな、などとも思うのです。母にとつて私は、実際には姪とはいえ、唯一の血の繋がつた「子供」ですからね。

こういうことに気づいたのは、私のアメリカ留学が決まったことへの、母とローザの反応の違いからでした。

ローザの反応は知つての通りです。後先考えず、電話してきました。

「何で知つたの?」って言つと、

「手紙で見た」なんて答えるんですよ。「孝弘君に見せてもらつた」なんて。

こんな人が他人をコントロールできるワケがありませんし、そんな気も無かつたでしょうね。純粹に『寂しい』ってだけで、激情的に動ける人だつたんです。

で、母は同じ日の電話で、

「ローザから聞いた。アメリカは、私は賛成する。だから、思い切つて行つてらつしゃい」って。

でも、口調がね、粘つこく引き留めてるんです。

それで私はひどく混乱しました。

母の望むように勉強して良い子になつて、そして一流の大学に進学して、さらには日本の大学を超えてもっともつと偉い人になろうとしているというのに、どうして心から喜んでもらえないんだろうつて。

言葉と口調どが著しくかけ離れた母の反応は、私を極度に不安にしました。

例えば犬が『どこへでもお行き』って解き放たれたようでいて、それでも手綱は首にしつかりと巻かれているような、どうしていいのかわからない気持ちになつたのです。それで、留学については時期を見てローザや母に話そうと思つていたのに、それなのに今二人に知らせてしまつた貴方へと、私の怒りは向いたのでした。

でも、いくら貴方に怒りをぶつけたつて、母の、あの、言葉と口調との矛盾が消えるわけではありません。時間が経つにつれ、母は本当のところはどうして欲しいんだろうって、そればっかりを考えるようになりました。本人に聞くわけにもいきませんしね。だつて、答えはわかつてますから。「賛成よ」つて。本音が聞きたいのよつて言つてみても無駄でしようしね。きっと「心から賛成よ」つて言うに決まつてますから。

そうやつて悩んでいたら、突然ローザが東京にやつて來たんです。で、

「アメリカ行つてもエエから、私を捨てんとつてくれ」つて。
なんか、ホッとしました。口調と本音の一一致に。それで、一晩、話し合いました。ローザの考えは私と同じでした。母はやはり引き留めたいと思つてる、でもそれが出来なくて、自分の心の矛盾に苦しんでいる、と、そんなことをローザは言いました。

「私も取り乱して悪かつたけど、お姉ちゃんのあの落ち着きはもつと質が悪いと思う。本人は、心からアンタのことを考えて賛成した気になつとるけど、あれは自分を騙しとる。本音では泣きわめいてでも引き留めたいはずや。口では賛成つて言いながら、もつと他の手段で『行くな』いうメッセージを発しとる

「うん。それは感じるよ、すごく」

「やから、やつぱりアンタはアメリカに行くべきやと思ひ。アンタ自身が、お姉ちゃんから自立するためにもな」

「自立?」つて、その時私は聞き返したと思います。

「やうや。アンタはお姉ちゃんに縛られると毎つ。どうかで吹っ切らんとあかん」

そう言えば、あの夜には貴方の話は出ませんでしたね。お互に避けてたんでしょうね。

今回も長いメールになつて御免なさい。

某月某日

洋子様

お父様のこと、心よりお悔やみ申し上げます。お会いしたことはありませんが、きっと立派な方だつたんだよ、貴女にこれほど慕われているんですから。

僕が貴女ほど文章が上手ければ、もっと色々と書いて差し上げられるのでしようが、申し訳ありません。

東京に行けとローザに言つたのは僕です。思えば、あれがローザとの最後の会話でした。

某月某日

孝弘様

四十九日もとうに過ぎ、しみじみと父の不在を瞞みしめています。夕方になると悲しくなり、つい涙を流すことがあります。

ローザが死んだときには、私は泣くことさえ出来なかつたのに。今になつて思えば何か不思議ですが、ローザが死ぬなんて、私にはありえないことで、目の前に起つてゐる出来事、その事実をうち消すのに躍起になつてたつて感じですね。病院からの電話でも、ただの事故としか聞いていませんでしたし、ローザに会つて、お亡くなりですつて言われたときも、本当に併並みな反応ですけど、『ウソでしょ、寝てるだけでしょう』って。

それからはもう、警察から事情聞かれたり、ローザの友達からは警察には関わるなつて言われたり、『偲ぶ会』発起人の三人が色々と手配してくれなかつたら、どうなつていたことだらうつて思いま

す。

前にも書きましたように、警察の調査は長引いて、ローザの公的な葬儀の機会は、結局、逸してしまいました。まだ調査中で遺体も帰つてきていなかつた中、身内だけの葬式を、公園の集会室を借り、本当にささやかに持ちました。でもお三人が、これはあんまりだからと追悼集会をしようと言い出され、あの『偲ぶ会』の開催に至つたのです。招待する方々は、最初の基本的なラインをあのお三人が選定した上でそのリストを私が最終的にチェックしたのですが、当然、その中に貴方は入つてはおりませんでした。

私は貴方のことをずっと忘れずにいましたし、ローザも、死ぬまでにもう一度貴方に会いたいなんて、戯れに言つていたこともあります。私は貴方の名前をリストへ加えました。もちろん、来てくれるかどうかは貴方の気持ちにかかるつていうわけで、リストに加えたからと言つて貴方が来てくれるかどうかはわからないわけだけれど、でも、私には、来てくれるだらうという確信がありました。

最終締め切りの後、参加者名簿の中に貴方を見つけ、しかも泊まりだと知つて、私はひどく嬉しかつた。ローザを亡くして何か穴を開いてしまつた日常の中に、貴方との再会への期待という、古いような新しいような充実がもたらされたのでした。実は『偲ぶ会』に主人を呼ばなかつたのは、姑息ですが、貴方との再会を純粹なものにしたかつたからなんです。そしてあの夜、私の気持ちは純粹でした。私の中では二十年の時間は消え去り、二十年前と同じ気持ちで、二十年間のわだかまりを消すことが出来ました。たぶん、私は貴方にお礼を言つべきなのでしょう。ありがとうございました。

明日から産院に入ります。ローザの友達のやつている自然出産の産院です。これまで、ローザのやつてることを基本的にバカにしていましたが、自分が母になると思うと、急に色々と不安になり、考え始めるものです。人間つて勝手ですね。

生と死と、まるで父やローザに入れ替わりです。
メールはしばらくお休みさせてくださいな。

*

『偲ぶ会』の夜、洋子は自分の部屋に戻らなかつた。

そして、じく自然に僕らは身体を重ね、二十年という時を一足で乗り越えた。僕らは何一つ、変わってはいないようだと思えた。

「昔の気持ちを」と洋子は言つた。「今の身体で確かめるなんて。そんなこと、出来るわけないのにね」

「出来なかつた?」

「出来たから、不思議なんよ」

「うん」

「みんな平等に歳をとるって、結構いいことかも知れへんね」「考えてみれば、洋子と一緒にすることは初めてだつた。

僕らは昔ラブホテルのサービスタイムによくやつたように、暗闇の中で、互いの顔を見ずに語り合つた。留学中のこと、職場のこと、最近のローザのこと、等々、話の足りぬ洋子に比べ、子供のこと以外に話題のない自分がなんとなく情けなかつた。

話しているうちに僕らはいつの間にか寝てしまい、洋子に起こされたときにはもうカーテンの向こうがほの白かつた。もう一度身体を重ね、洋子は自分の部屋に戻つていた。

*

三宮で待ち合わせてJRに乗り、垂水駅を出て駅前に立つなり、僕らは顔を見合させ、空を見上げて立ちつくした。駅正面にあつたはずの商店街からはアーケードが外され、広げられた道に視界も広くなり、これだけでも充分、地理カンがマヒさせられた。それに加えて巨大なビルがいくつも建ち、空気には道路工事の埃と喧噪が満ちていて、とてもここが垂水駅前とは思えなかつた。僕にも洋子にも、まるで見たことのない街だつた。

「洋子さんは、垂水は何年ぶり?」

「七年ぶり、かなあ。このあたり、震災の被害はそれほど酷くなかったって聞いてたから、昔の風情もあるかなって思つたんだけど」

「新幹線やと、新明石から新神戸までつてほとんどトンネルやから、

僕はこのあたりは景色もしばらく見たこと無かつた

僕らは商店街を少し歩き、脇道に入つて、あの頃よく行つた喫茶店を探した。ところが、僕にも、洋子にさえ、現在地もわからない状態だった。

「高校に行つてみる？」と洋子は申し訳なさそうに言つた。

「校舎は確か、建て替えられたんよね」

「そりなんよ。風情のある建物やつたのにね」

「なんか、このあたりで昔のままのところつてないんかな」

「そうね」と洋子は工事中の道路に立つて考え込んだ。

昨日までの雨はきれいに上がり、澄んだ青空が広がっていた。そのかわり、風は北から強く吹きつけ、洋子の長い髪をなぶついていた。

「五色塚は？」

「古墳？」

「そう。なんばなんでも、古墳は昔のままでしよう」

「そりやそうだ。あそこの上からの景色、すゞかつたね」

「じゃ、古墳に行こい」

坂道を登り十分ほど歩くと、道の向こうに、敷石で葺かれた古墳のテラスの部分が見えてきた。古墳に近づくほどに視界には明石海峡大橋と淡路島が広がり、浅い春の穏やかな日差しに波打つ海峡からは、呼び交わすような汽笛が風に逆つて聞こえてきた。

「ここつて、確かに、古墳の上に昇れたよね」

古墳の回りは空堀と金網で囲まれ、中には入れないようになつてゐる。

「うん。昔はよく昇つたもん」

僕らは前方後円の「円」の部分に沿つた道を降り、入り口のある事務所の前まで来た。ところが入り口には、月曜は見学は休み、との旨の書かれた札が下がつていた。

「神戸って、月曜休みの所、多いんよね」と洋子は思い出したように言った。

「残念」

「私も、ここまで何しに来たんや！」

「この古墳は変わらないから、HIIよ。充分、懐かしいよ」

「じゃあ、このまま舞子の方まで降りていこうか。大橋の橋脚まで」

「いいね。実はまだ大橋の下には行ったことないんや」

*

山陽電車の線路を越え、坂を降りて今度はJRの線を越え、国道に出で向こうへと渡ればもう海岸だった。コンクリートで整備された公園の頭上には巨大な大橋が傲岸に聳え、ローザならきっと露骨に嫌悪を催しそうな光景だつた。

「天気が良くてよかつたね」と洋子は言つた。

「本当に」と僕は心から言つた。柔らかな日差しを受けながら、二十年前と同じように洋子と並んで歩くことの喜びが僕の心を素直な幸福で満たしていた。

洋子は海岸の手すりにもたれながら、

「憶えてるかなあ。昔、つきあい始めた頃、ここからの夕焼けを見ながら、私がきれいねつて言うたんよ。そしたら、孝弘君も、うん、言つて、一緒にずっと夕焼けを見ててくれたん」

「憶えてるよ。洋子さん、言つたもん。こうやつて、夕焼けを一緒に見ながら、きれいやつて言い合える友達が欲しかつたつて。あの時は僕も切ない気持ちになつたんやで。洋子さんことを本氣で好きやつて思つた」

「やのに今、孝弘君は愛媛に奥さんや子供たちと一緒にいて、私は一人でここにいて。不思議やわ」

「僕は何も言えなかつた。

「別に責めてるんとちやうよ。人間の運命なんてそんなもんやろつて思うだけよ」

「そういや」と僕は思いついて言つた。「移情閣、この辺じやなかつたつけ」

「あそこ」と洋子が指さした橋脚の足下に、まるで三角帽子をかぶつた細長いガスタンクのような色と形の建物があつた。

「あれ？ あんな所だつた？」

「移築されたんよ。今は孫文の博物館になつてゐる」

僕らはその前まで歩いて行つた。

「ここも休館や」と洋子は言つて笑つた

僕も笑いながら、さつき洋子の言つた不思議、僕は妻や子供たちと一緒に愛媛について、洋子は一人でここにいるといつ不思議を思つた。

「まあ、天氣がよかつたのが何よりやうね。月曜とか、細かなことはどうでもエエ」

「きつと」と洋子は言つた。「今日、ローザが晴れにしてくれたんよ。私と孝弘君のために。で、あんまり私らが仲がエエんで、嫉妬して、今日を月曜日にし、どこも入れんよつにしてしもたんよ」

僕らはそのまま舞子駅まで歩き、ホームで別れた。

洋子の住所も電話番号も、勤め先さえ聞いていなかつたことに車内で気づいた。

車窓から眺める瀬戸内の景色が切なかつた。
そして愛媛の家に帰ると、また、ただの日常だつた。

*

某月某日

孝弘様

昨日、男児と一緒に退院してきました。

結局、自然出産は無理でした。年齢的なものもありますが、大きく育ちすぎたんです。予定日を十一日も過ぎており、性格の悪さもポチの子らしいと、みんな言つてくれてます。

でも、ここだけの話、ポチも私も一重目蓋なのに、この子、笑うと、一重の目元が誰かさんそつくりなんですよ。もちろん、ポチの血液型は貴方と同じO型です。

けっきょく私はローザの娘だし、しょせんはコノローンの申し子だつたつてことでしょうか。私にとつては、私がどちら側の人間か

を占つ大きな賭だつたんですが。

で、私の本当の父親の真似をします。このメアドはこれで廃止にします。私のメールは、どうかこのままトイレにでもお流し下さい。それでは、ローザが、また私たちを引き合わせてくれる日まで、さよなら。

あの日の明石海峡の美しさは一生忘れません。

貴方に会えて幸せでした。

貴方もどうか、お幸せに。

某月某日

洋子様

⋮

*
書きかけのメールを廃棄し、頬杖をつきながら僕はあの日の海峡を思った。

いつたい僕は誰と、あの光の中を歩いていたのだろう。

洋子のことを想いながら、僕は思わず『ローザ』と呟いていた。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2173d/>

ローザ

2010年10月8日15時13分発行